昭和60年7月15日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第14号　通巻635号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
14
7.15.



特集　青年学生祭を迎えるモスクワ

第14号　1985年7月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

平和と連帯をめざすソ連の青年

——ビクトル・ミーシン全ソ・レーニン共産青年同盟（コムソモール）
中央委第一書記・ソ連最高会議幹部会員に聞く



モスクワでの平和行進に参加するためコスモス・ホテル前に勢ぞろいした世界の青年代表



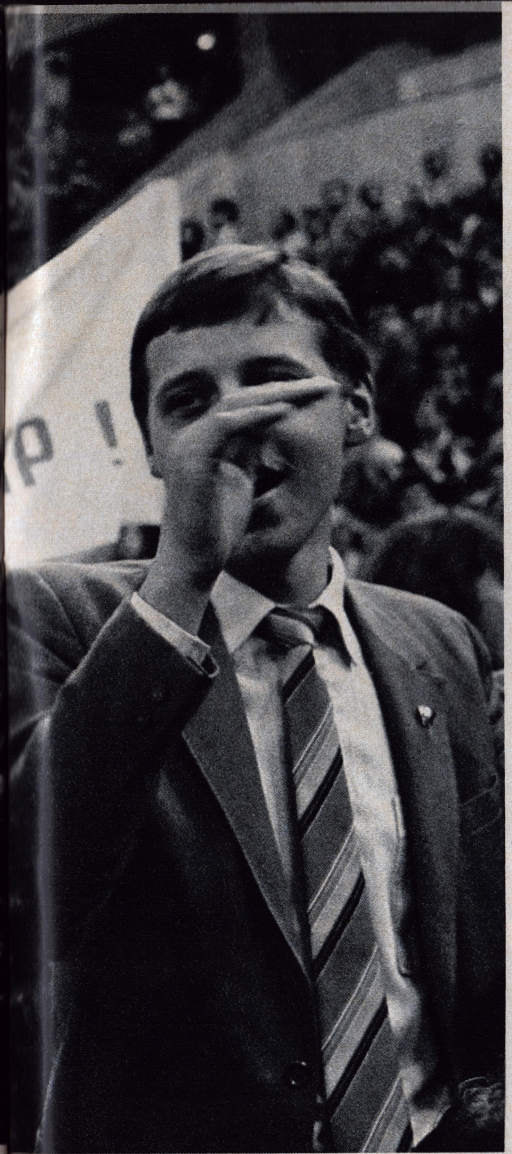
昨年モスクワで開かれた国際勤労青年集会の開会式



赤の広場を訪れた国際勤労青年集会の参加者（1984年）

就職して最初にもらう賃金の一部を平和基金に納入するのが、ソ連の青年のよいしきたりになっている。写真は夏にコルホーズでかせいだお金を平和基金に入れる手続きをしているボロネジの高校生。







「私は平和に賛成投票する」アピールには、数万のソ連の青年が署名した。

モスクワのルジニキ・スポーツパレスで行われた青年の平和集会

全ソ・レーニン共産青年同盟（略称コムソモール）はソ連最大の青年の社会・政治団体で、四二〇〇万人の同盟員（コムソモール員）を擁する。国際青年年にあたり、ビクトル・ミーシン・コムソモール中央委員会第一書記（ソ連最高会議幹部会員）にソ連の青年たちの活動やその願い、モスクワで開かれる第12回世界青年学生祭などについてインタビューした。

——国連は一九八五年を国際青年年と宣言し、世界の一〇億の青年の現状と将来に重大な懸念を表明した。あなたはソ連の青年に対してもそのような懸念を抱いているか？

ソ連の青年に限らず、世界の青年について言えることだが、今の若い世代は、未来は青年のものという公理を改めて証明しなければならなくなっている世界史上最初の世代だということだ。われわれは核破局の淵に立っており、現在のいろいろな悩みや希望、将来の見通しを抱えた青年の生存そのものが危ぶまれるようになっている。こんなありさまでは、誰も無関心でいられないのは当然である。

われわれは国際青年年のテーマ「参加、開発、平和」を支持しており、国際青年年が恒久平和と諸国民間の相互理解をめざしてたたかっている世界の進歩青年の結集に拍車をかけ、よい変化が起ることを期待している。

ソ連の青年はとても積極的だとわれわれは思っている。ソ連の青年はソ連における社会主義的民主主義の発展、環境保護、長期の幾つかの経済計画の実現、東部、北方地域の新しい土地の開発などと関連した数多くの問題を抱えている。そのほかに教育の質の向上、職業選択の指導の改善、新卒高校生の労働への適合などといった青年だけの特別な問題もある。これらを解決しなくては、社会は前進できない。そしてコムソモールには、全国規模でのこれらの問題の解決に影響を及ぼす力が現実にある。

青年の社会的活力を証明し、さらには青年と最も有力な青年団体コムソモールがソ連でどれだけの重みを持つかを示す数字を幾つか挙げておこう。ソ連の国会議員（ソ連最高会議代議員）の$\frac{1}{5}$余りが30歳未満の青年である。さる2月の連邦構成共和国と自治共和国の最高会議や地方の人民代



議員ソビエトの選挙では、当選者の$\frac{1}{3}$が青年だった。また指導的労組機関には一〇万人以上の青年が、人民監督機関の活動には一五〇万人余りのコムソモール員が選出されている。

コムソモールは国家権力機関に法案を提出する権利をもっている。ここ数年間にコムソモールがこの権利を行使した回数は二〇〇回余りで、たとえば「シベリア、極東の新建設場で働く青年の新たな特典に関する」法律、「学習と生産の仕事をうまく結合している青年男女の労働時間の短縮に関する」法律、「大学、中等専門学校の学生生徒への奨学金の増額に関する」法律などは、コムソモールのイニシアチブによって採択された。

しかし社会管理への参加、経済の発展または文化の発達で青年の果たす役割と関連した諸問題が、たとえわれわれの関心を呼んだとしても、やはり中心となるのは平和維持の問題であり、平和問題は個々の具体的な人間、各世代、各国、全地球にとってまさしく生死の問題である。だから八〇年代に入ってソ連の青年の反戦運動の波が高まったのだ。次に反戦運動の幾つかの例を挙げておこう。

反戦行動「私は平和に賛成投票する」には七〇〇〇万人が参加した。バイカル・アムール（バム）鉄道の青年建設者たちは反戦運動家に自分たちの移動列車・クラブを提供した。列車・クラブはソ連の太平洋岸から西部国境まで走って、熱核破局の脅威の高まりを憂慮する青年の気持ちを沿線の住民に伝えるとともに、二〇〇〇万の反戦アピール署名を集めて国連本部に送った。

コムソモールはことしの夏にモスクワで第12回世界青年学生祭を実施するイニシアチブをとり、なによりもまず平和闘争の利益と反軍国主義、反帝を基盤とする世界の進歩的青年の団結をめざす闘争の利益を主軸においた。およそ人類の主要な敵、現在の平和の敵のナンバーワンは帝国主義であり、帝国主義は諸国民間に敵意のタネをまき、国際緊張を強め、権利と自由を踏みにじり、交渉ではなく、力の立場から国際紛争問題を解決するのをよしとしている。

第12回青年学生祭は国際青年年の中心的イベントであり、すべての大陸の青年代表の大会であり、さまざまな国の青



ともに平和と軍縮をめざしてたたかおうというソ連の青年のアピールを支持した世界の青年代表。



子供をまじえたハバロフスクの平和デモ行進

年男女を平和運動に結集するすばらしい手段である。

——ソ連の青年反戦運動はソ連政府の対外政策に合致するスローガンを掲げているのに、西側の平和運動はしばしば自国政府の決定に反するスローガンを掲げている。これはどうしたわけか？

世界のどの国の反戦運動も軍拡の中止と宇宙の軍事化反対を唱え、現在保有する核兵器の凍結とその後の完全廃絶の構想を支持している。これらの要求はすべてソビエト国家の指導者たちの発言や行動、ソ連政府の声明や提案にも反映している。われわれの見るところでは、ソ連政府は平和をめざす青年や全ソ連国民の意思を終始一貫政策に反映している。

ソ連のどの政府要人も、どの軍人も、"限定核戦争"の可能性とか、人を皆殺しにする"人間的な"やり方があるとかを口にしたり、"勝利できる核戦争"の宣伝をしたりすることなど、思いつかない。これはすべてのソ連国民の道徳的基準であるだけでなく、戦争宣伝はソ連の法律で禁止されている。

先ごろソ連国民はヒトラー・ファシズムに対する勝利40周年を祝った。ソ連国民はナチズムの壊滅に決定的な貢献をした。ソ連の今の若い世代は戦争の恐ろしさを体験していないが、いまも死者を悼んで涙している家族の中で成長した。第2次世界大戦中に死んだソビエト人は実に二〇〇〇万人以上にのぼった。一九四一年にドイツ・ファシスト軍の攻撃を最初に受けたベロルシア共和国では、ほとんど全部の住民地が戦火を浴び、しかも多くの町や村は住民もろとも灰となり、住民の$\frac{1}{4}$が死んだ。当時の侵略者は核兵器をもっていなかったから、まだ生き残れた人がいたのである。われわれソビエト人は戦争がどんなものかをよく知っており、さらに大規模な悲劇を繰り返すのはまっぴらである。ソビエト人は皆、戦争が日本国民にどのような災苦をもたらしたかも知っているし、広島、長崎の住民の悲劇も知っている。そして日本の平和運動家の活動を高く評価するとともに、日本の平和運動をとても尊敬している。モスクワの青年学生祭に来る日本青年の代表たちは、私の言ったことに間違いがないことを、モスクワでもう一度確認できよう。

——「反帝連帯、平和と友好のために」という青年学生祭のスローガンについてコメントを。

このスローガンは一九八四年2月にハバナで開かれた国際準備委員会の第1回会議で採択された。この会議には92カ国から一八六のさまざまな政治傾向の青年団体の代表が参加し、平和と安全保障、核戦争の脅威の除去、国際緊張緩和の維持の諸問題を最も重視する必要について論議した。

われわれは約一五〇カ国の青年が参加する青年学生祭が、強大な反戦デモの流れとなると信じている。そして青年祭が、デタントを打ち壊し、世界の緊張を強める者たちに反対するものとなるのは、しごく当然である。

青年にはエネルギーがあり、平和に暮らそうという意思がある。自分の未来のためにたたかう青年の力は団結にある。団結するためには互いにもっとよく知らねばならない。われわれは青年祭開催中に、セミナー、会議、討論会で、また反戦大衆集会のときに、率直な実務的な話し合いが行われることを期待している。

それと同時に青年学生祭は、八〇年代の青年の記憶に友好の祭典として刻み込まれるだろう。政治的行事は文化・教宣、スポーツ行事と結合されよう。これまでのしきたりにならって若いアマ、プロのアーチストが出演するほか、お祭り行進、カーニバル、美のコンクール、歌と若い映画人の映画、若い美術家の作品展、スポーツ競技など多彩な催し物もあるだろう。

政見のいかんを問わずどの青年にも、人間のしあわせの主要条件として平和が必要である。われわれは平和と進歩の勢力が勝利すると信じている。そして青年学生祭そのものは、この勝利へ近付く一歩となり、この信念を示威するものとなるだろう。



開会総会の会場

札幌での固い握手

——第2回ソ日極東・北海道友好交流会議に出席して

M・エフィーモフ

6月4日から7日まで第2回ソ日極東・北海道友好交流会議が札幌・パークホテルで開かれ、ソ連側代表団二一四人、日本側代表団二二九人、計四四三人が出席した。代表団の顔触れは市長、国会議員、地方議員、地方自治体代表、学者、貿易関係者、一般勤労者、有名スポーツ選手など、非常に多彩であった。

ソ連側代表団長はA・K・チョールヌイ・ソ連共産党ハバロフスク地方委員会第一書記、日本側団長は阿部文男・衆議院議員であった。

開会式では日本側の名誉団長横路孝弘・北海道知事があいさつした。横路知事は先ごろロシア連邦共和国閣僚会議の招きでソ連を訪問し、方々でソ連の多くの人と会見、会談した。知事はメッセージの中でソ連の指導者たちに心から感謝の言葉を述べた。日本の水産界の代表たちは先ごろ公海上で遭難した日本漁船の乗務員の救助にさいし、勇敢でけだかい行為を示したソビエト人たちに衷心から感謝した。



▲開会総会であいさつするチョールヌイ・ソ連側代表団長。その左は阿部文男・日本側代表団長（衆議院議員）

第2回友好交流会議（第1回は昨年ハバロフスクで開催）では、総会だけでなく、「勤労」「経済貿易」「友好」「漁業」の4分科会も開かれ、協力のきわめて広範な問題が討議されたが、この点が札幌会議の特徴の一つだったと言えよう。しかも会議の進行過程で沿岸貿易、文化・学術交流、姉妹都市関係の幾つかの協定が結ばれた。これが会議自体の権威を高めるのに役立っ



▲第1分科会（友好）の会場



▼第2分科会（勤労）の日本側参加者



第3分科会（経済）のソ連側参加者

ナホトカから船で到着したソ連側代表団の歓迎集会（小樽港）



▶ソ連側代表団の歓迎集会であいさつする細谷正和・小樽市助役



歓迎に応えるチョールヌイ・ソ連側代表団長



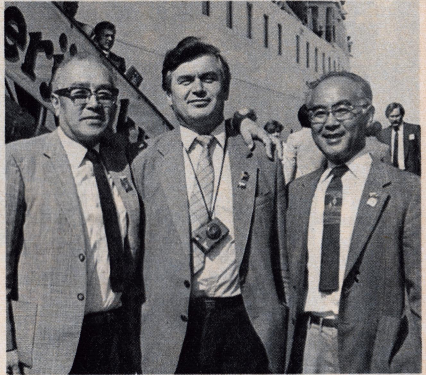
花束を贈られた小樽市の姉妹都市ナホトカのA・トカチョフ市長

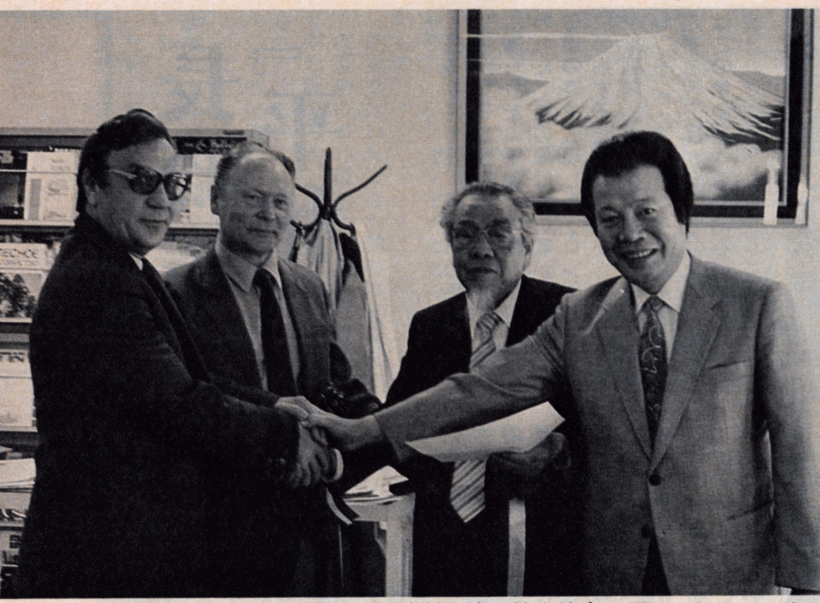


たことはもちろんであり、また協力の問題の討議によって会議は一段と具象的、具体的な色合いをもつにいたった。

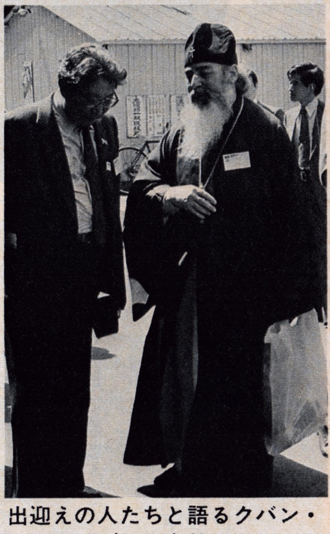
開会式のさいA・K・チョールヌイ・ソ連側団長は、ハバロフスクの工芸家たちが合同制作したユニークな絵を日本側代表団に贈った。この絵には極東の風景が描かれているが、素材は大理石のごく細かい粒である。思うにこれは、ソ日協力全体が、ぜひとも善隣を確立したいという相互の熱意に裏打ちされた、大理石粒のような沢山の接触、

ソ連側代表団の一員として来日したソーチ市中央区のアベリヤノフ区長（中央）を出迎えた北海道・虻田町の岡村正吉町長（左）と「日ソ友好をすすめる虻田町民の会」の大宮実氏。虻田町とソーチ市中央区はアベリヤノフ区長の訪問を機会に友好親善促進の協定を結んだ。

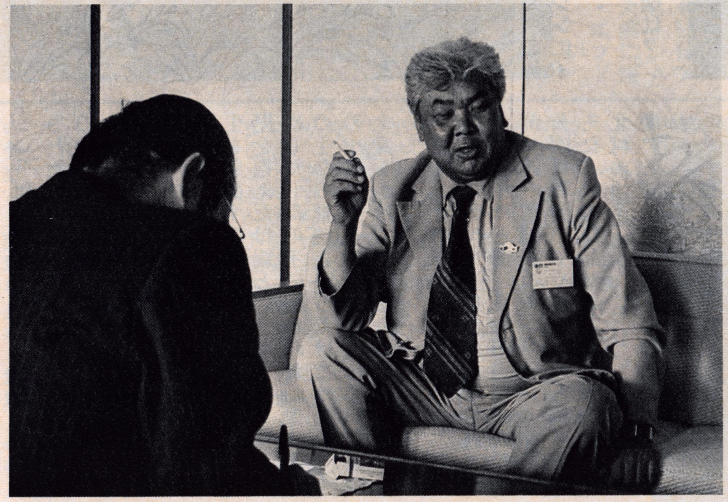




北海道日ソ友好文化会館とソ連対文連の協力協定の調印を終えて。左から対文連のヤナエフ幹部会副議長、一人おいて友好文化会館の柴野安三郎理事長、立花忠臣常務理事。



出迎えの人たちと語るクバン・クラスノダル大主教のウラジーミル・コトリャコフ師



日本の新聞記者のインタビューを受けるI・ダルジャーエフ・ブリャート自治共和国副首相

協定、会談から成り立っていることを示そうとしたものであろう。

記者は会議中に多くの出席者と話をする機会に恵まれた。彼らは異口同音に、会議はとても有益で実り多かったと語り、とくに、極東における協力の問題の審議が、ファシズムと軍国主義に対するソビエト国家の偉大な勝利の40周年の年に行われたこと、しかもアメリカの原爆の恐ろしさをつぶさに味わった国で行われたことの重要性を強調していた。

この会議のシンボルマークは、ソ日両国の国旗をバックに固く握手している図案で、なかなか象徴的であった。そのマークは会議出席者全員がもらったバッジやパークホテルにはられた色鮮やかなポスターや毎日発行された会議のブレティン「友好」の表紙にもついていた。

ソ連側代表団の幹部たちは口をそろえて、会議は非常に有益だったと述べ、会議を支配したよい雰囲気は、ソ日関係を改善できるという期待を高めたと感想を語った。この会議は、ソ日双方が交わした握手がきわめて固いものであることを示した。

長崎市へ贈られた『平和』の像

K・デリバス

去る6月1日、長崎市の平和公園でソ連から日ソ親善協会を通じて長崎市に贈られた『平和』の像の除幕式が行われた。この像は幼い我が子を抱いた母親の姿を表現したブロンズ製。式典に参加するため、ソ連からイズベスチヤ紙副編集長でソ日協会副理事長のワレンチン・アルハンゲリスキーを団長とする代表団が日本を訪れた。団員にはこの像の制作者であるソ連人民美術家ミハイル・アニクーシンも加わっていた。

除幕式であいさつした本島 等・長崎市長は、『平和』のモニュメントが長崎市に贈られたことは、平和を達成しようとするソビエト国民の決意と熱望を証明するものだと述べた。

除幕式終了後「今日のソ連邦」の依頼で、像の作者M・アニクーシンにインタビューした。



▲平和公園での除幕式のあと、『平和』の像の前で記念撮影する（左から）作者のソ連人民美術家M・アニクーシンと本島 等・長崎市長

——『平和』の像の制作意図は?

『平和』の像は、一九七五年に公開されたレニングラードの英雄的防衛者の大モニュメントの構成部分として考えたものだ。それは、一方では、私たちの力の源である母なる祖国を、他方では、ひとたび始まったものを継続し守り抜く力をそなえた新しい生命の誕生を象徴するはずだった。そこで、幼児を抱えた母親というコンポジションにした。母の手に抱かれた幼児は未来の生命の継続というだけではない。その小さな手の動きを見てほしい。幼い全身をかけて母親を危険から守ろうとしている。

実は、この作品は最近までモスクワのトレチャコフ美術館に展示されていた。2年ほど前、長崎市当局の人たちがソ連の彫刻家のモニュメントを平和公園に寄贈してくれないかと頼みに見えた。私の作品がこんご日本の彫刻家北村西望氏のすばらしい『平和祈念像』と同じ敷地に立つのは、もちろんたいへん名誉なことだ。

——長崎市の印象は?

とても美しく居心地のよい都市だ。新しく復興した町には戦争の痕跡はなにもない。私が住んでいるレニングラードの運命も長崎に似ている点が多い。九〇〇日の封鎖中、爆撃や飢えや寒さで平和な住民だけでも60万人以上死んだ。だから、レニングラード人の私には広島と長崎の悲劇を感じる気持ちもとくに強い。

平和公園や国際文化会館（原爆資料センター）へ行き、長崎市の人たちと話を交わせば交わすほど私は、長崎と広島が核軍備競争の危険を次代の人々に警告する忘れられない教訓になり、また地球上の平和を強化せよという呼びかけにならねばならないという確信を強めた。

——あなたはソビエトの長老彫刻家のひとりだが、どうして彫刻家としての道を踏み出したのか?

私は文字どおり革命直前の一九一七年10月2日、モスクワで生まれた。一九三五年に中学を修了してから、芸術大学へ入ったが、5年生のとき戦争に邪魔された。軍隊に召集され、封鎖中ずっとレニングラードで戦った。戦後学業を続け、一九四七年に卒業制作を完成して合格し、すぐ美術家同盟に入れてもらった。

——あなたの作品はレーニンを主題にしたものが多いが。

レーニンの彫刻を制作することになって最高に幸せだ。レーニンの影響は、精神的、道徳的、それに純日常的影響と言いたいものもあるが、実に大きく強烈だ。

私が初めて制作したレーニンの像は一九七〇年にレニングラードのモスクワ広場で除幕式をした。日本人がよく訪れるナホトカ市に建てるレーニンの記念像もちょうどこの頃ほぼ完成していた。レーニンの像をつくる仕事はぜひ今後も続けていきたい。レーニンが19世紀の末頃流されていたシベリアのサヤン・シューシェンスコエの水力発電所に建てるレーニンの銅像をつくるのが私の夢だ。

平和のための世界風刺画展



世界風刺画展の開会式であいさつする岩倉・平和博物館館長

6月10日、東京・港区芝の平和博物館で世界各国の作者の風刺画を集めた「平和のための世界風刺画展」が開かれた。この展覧会は平和博物館（岩倉務館長）がソ連文化省と協力して開いたもの。

日本で行われるこの種の展覧会としては最初のこの風刺画展には、世界21カ国の画家の約一〇〇点の作品が展示された。これらの作品はいずれも一九八三年の第4回国際風刺画展（モスクワ）に出品されたもの。この国際風刺画展は4年に1度、ソ連で開催されている。

なお、東京での世界風刺画展の開催にあたり、ソ連漫画界の長老でソ連人民美術家、ソ連美術家同盟理事会書記のボリス・エフィーモフ（85歳）が来日した。

世界風刺画展の開催期間は7月9日まで。場所は東京都港区芝1－4－9、平和会館内平和博物館（電話03－454－5859）。



展示作品についてA・モフタト駐日アフガニスタン大使（中央）とG・シュミット駐日チェコスロバキア大使に説明するソ連人民美術家ボリス・エフィーモフ

札幌で「アルタイ地方展」開催



「アルタイ地方展」初日のにぎわい

〝シベリアの真珠〟といわれるソ連のアルタイ地方を紹介する「アルタイ地方展」が6月2日から18日まで、札幌の北海道日ソ友好文化会館で開かれた。

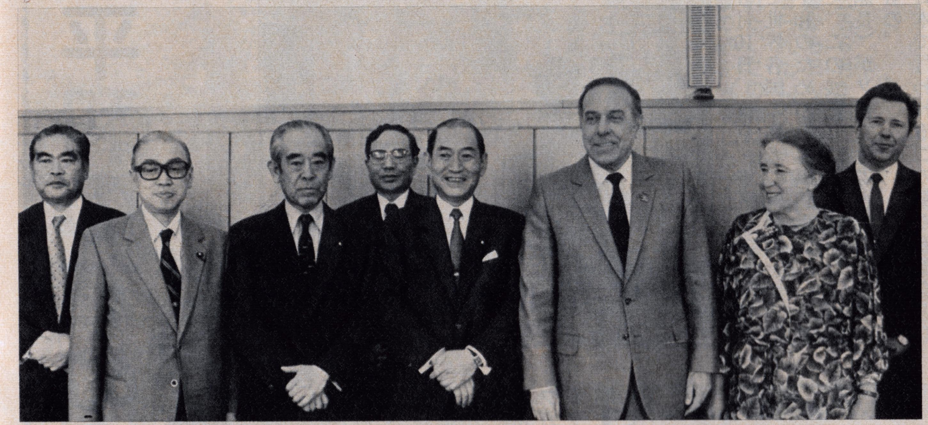
アルタイ地方はソ連西シベリアの南東部に位置し、面積二六万平方kmに二七〇万人が住んでいる。スイス・アルプスを思わせる自然に恵まれており、大規模な機械化農業に自動車、石油化学工業などが発達して〝シベリアの誇り〟とも呼ばれている。シベリア開発に伴って北海道との関係もますます深まることが予想されている地域だ。

今回の「アルタイ地方展」は、同地方の魅力あふれる自然と躍進する産業の全体像を紹介したもので、動物・鳥類の剥製や民族衣装、生活用品、絵画・写真パネルなど数百点が展示された。

初日の6月2日は午前11時からオープンのセレモニーが行われた。同会館の柴野安三郎理事長が「地球上の全人類を数十回も全滅させることができるほど大量の核兵器が貯蔵されている現在、世界の平和ほど崇高な目的はありません。第2次世界大戦でそれぞれ三〇〇万人と二〇〇〇万人の貴い人命を失った日ソ両国民は、戦争のない平和な空の下で幸せに暮らしてゆきたい、という悲願を共有しております。日ソ両国民が、かけがえのない地球に自らの生を託す人間同士として十分に理解しあい、信頼を深めあうことが何よりも必要です。日ソ両国民の平和への願いがこの交流展に託されているのです」と、あいさつしたのに応えて、ミーシェンコ同地方知事が「両国は日本海をはさんだ隣同士。一層の交流をはかりましょう」と述べた。

テープカットのあと、待ちかねた入場者二百数十名が展示場に入り、夢とロマンあふれる同地方の展示物に見入っていた。

自民党国会議員団の訪ソ



5月20日、アリエフ・ソ連共産党中央委政治局員、ソ連閣僚会議第一副議長は鳩山威一郎氏を団長とする日本国会議員団と会談した。

鳩山威一郎参議院議員・日ソ親善協会副会長を団長とする自民党国会議員団は、5月16日から20日までソ連を訪問し、ソ日関係の発展の問題や先ごろ調印されたソ日漁業協力協定の実現の見通しなどについてソ連側と意見を交換した。

議員団はモスクワでA・E・ボス・ソ連最高会議民族会議議長、Z・M・クルグロワ・ソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）幹部会議長、T・B・グジェンコ・ソ日協会理事長、V・B・カメンツェフ・ソ連漁業相、M・S・カピッツァ・ソ連外務次官らと会談した。

5月20日にはG・A・アリエフ・ソ連共産党中央委政治局員・ソ連閣僚会議第一副議長と会談し、双方ともにソ日関係を前進させる具体的措置をとる必要があるとの意見を述べた。

G・A・アリエフその他のソ連の指導者たちとの会談のさい鳩山氏は、日本の政界では善隣協力条約や長期経済協力協定、文化協定の締結、極東における信頼強化措置や核の脅威を除去する問題での相互関係の諸原則などの諸提案をはじめとする、核戦争の脅威除去とソ日関係の改善をめざすソ連のイニシアチブはよく知られていると述べ、現在の課題は大多数の日本国民がこれらのイニシアチブを受け入れ、日ソ関係の改善に必要な環境をつくることであると強調した。

日本側はソ日関係全体のなかでの民間交流の役割を高く評価し、最近は民間の接触の拡大に伴って政府間の関係も前進したと強調。鳩山氏は両国関係の好転の前触れが見られた春と現在とを比較した。

話し合いのさい自民党議員たちは、ソ連国民との友好、協力が強まる中で漁業をやりたいと願っている日本漁民の多くの請願と要請を挙げるとともに、一九八五年度ソ日漁業協定を実現する具体的な問題に強い関心を示した。国会議員たちは、協定に基づくソ連漁船の塩釜寄港を妨害している右翼分子の行動を非難し、これらの妨害は排除されると請け合った。

会見、会談のさいソ連側は、国際情勢と両国関係の諸問題に関するソ連の立場を説明するとともに、核戦争の脅威の除去、アジア・太平洋地域の緊張の緩和、極東における信頼措置の強化、対日政治、経済、文化交流の発展をめざす最近のソ連のイニシアチブにとくに強い関心を示した。そのさい日本側が、これらの提案のせめて一部になりとも応じる姿勢を見せるなら、ソ日関係を発展させる重要な刺激となるに違いないことが強調された。

G・A・アリエフは、国際情勢を好転させ、ソ日関係を改善するソ連の諸提案は、一時的な場当たり的なものではなくて、平和共存と互恵の協力をめざすソ連の党と政府の原則的方針を反映していると述べ、われわれは隣国日本とのあらゆる分野の関係の改善を終始願っており、ソ連は真のソ日善隣関係は両国民の根本的利益に合致し、極東の平和と安全の強固な土台であると見ている、と強調した。

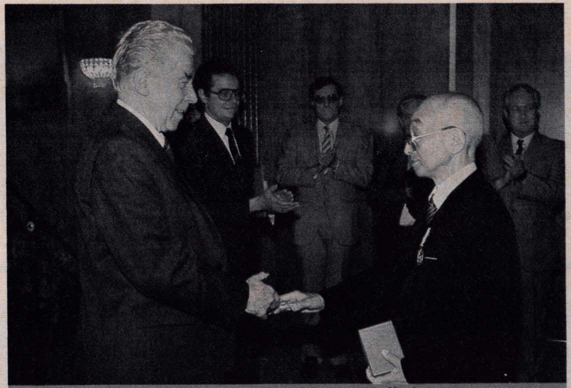
堀江・日ソ協会顧問に民族友好勲章



民族友好勲章を胸につけた堀江・日ソ協会顧問とアブラシモフ大使

既報のとおり、ソ連最高会議幹部会は、3月6日付の同幹部会令で日ソ両国民の友好と協力の発展・強化への多大な貢献に対して、堀江邑一・日ソ協会顧問に民族友好勲章を贈ったが、その授章式が6月12日、東京の駐日ソ連大使館で行われ、P・アブラシモフ大使がソ連最高会議幹部会の名において堀江氏に民族友好勲章を授与した。アブラシモフ大使は堀江氏にお祝いの言葉を述べ、日ソ友好関係を強化する上での氏の活動の重要性と大きな寄与を指摘し、この崇高な活動分野でのいっそうの成功を希望した。堀江氏はこれに対し感謝の言葉を述べ、今後も日ソ友好のために尽くしたいと語った。

高橋宣彦氏に名誉勲章



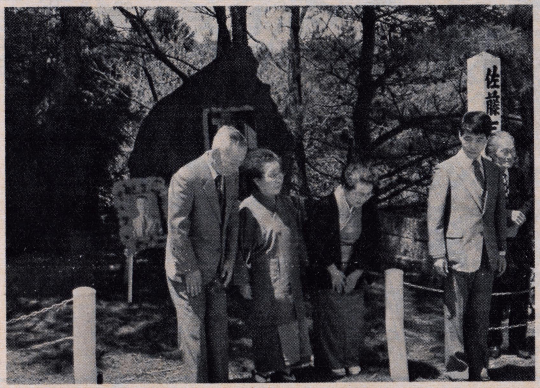
アブラシモフ大使からお祝いの言葉を受ける高橋氏

6月10日、東京の駐日ソ連大使館で元ソ連大使館広報部職員高橋宣彦氏への名誉勲章授章式が行われた。P・アブラシモフ大使がソ連最高会議幹部会の名において、日ソ両国民の友好強化と相互理解増進におけるすぐれた寄与に対し高橋氏へ名誉勲章を授与した。高橋氏はソ連大使館広報部創設以来、一九七七年に退職するまで20年にわたり日本人スタッフの中心として本誌の翻訳・編集に携った。また、この間、日本語版レーニン全集（大月書店）の翻訳にも参加。広報部退職後は日ソ学院の講師・主事代行を務めた。高橋氏は謝辞の中で、「今日のソ連邦」の創刊に参加した人たち、現在その刊行に従事している人たちの代表としてこの勲章を受けたいと語った。

国際主義者 佐藤三千夫を偲ぶ

5月12日、宮城県登米町で佐藤三千夫の事跡をしのぶ第4回呑牛忌が行われた。佐藤三千夫（一九〇〇―一九二二）はこの町で生まれ、10月革命後、日本帝国主義のシベリア出兵に反対してソビエト極東地方でパルチザン部隊に加わって闘った。佐藤は真の国際主義者として敵と闘い、史上最初のソビエトの国のために命を捧げた。ソビエト人は今もその名を高く敬っている。

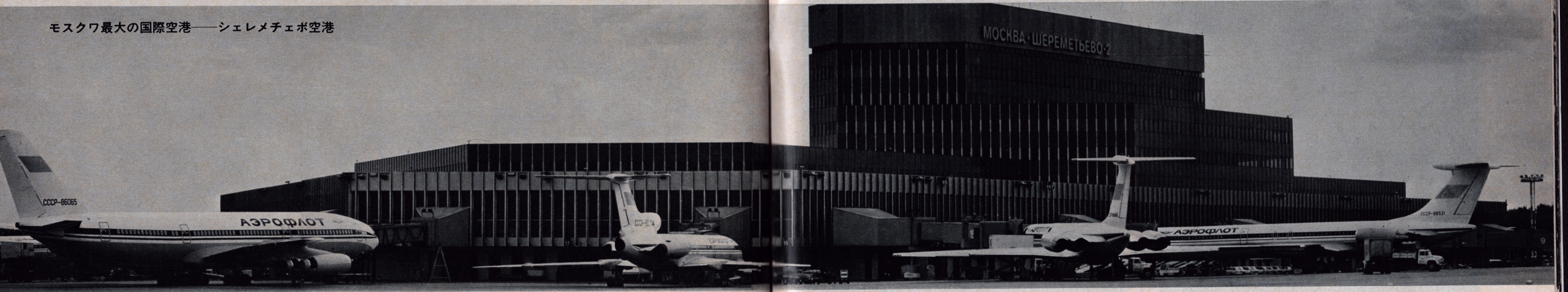
なお、呑牛忌は佐藤三千夫記念会（首藤直一郎会長）の主催で行われている。



呑牛忌の集いであいさつする佐藤三千夫の遺族

特集

世界青年学生祭を迎えるモスクワ



モスクワ最大の国際空港――シェレメチェボ空港



モスクワの概念図

①クレムリン
②ブールバール環状道路
③サドーボエ環状道路
④ゴーリキー通り――レニングラード大通り――レニングラード街道
⑤カリーニン大通り――クトゥーゾフ大通り

「反帝連帯、平和と友好のために」を合い言葉に、第12回世界青年学生祭がいよいよ7月27日から8月3日まで8日間にわたって、モスクワで開催される。世界青年学生祭がモスクワで開催されるのは、一九五七年の第6回祭典以来2度目。

この青年フェスティバルに参加するため、世界一五〇カ国から正式代表や来賓、見物のツーリストなど約四万人がモスクワを訪れる。フェスティバルでは、現代の世界と青年が直面する重要な問題を取り上げたテーマ別の討論会が開かれるのをはじめ、さまざまな文化・芸能行事、誰でも参加できるスポーツ大会などが華やかに繰り広げられる。モスクワはこの期間、世界の若者たちを集めて、フェスティバル一色に塗りつぶされる。

これを機会に本号では、フェスティバルの会場都市モスクワを紹介することにした。フェスティバルに日本から参加する方たちや、あるいは今後なにかの機会にモスクワを訪れる方たちに、ソ連の首都の歴史と地理についていくらかでも予備知識を持っていただこうというわけだ。

案内役はノーボスチ通信社記者のアレクサンドル・フラトキンが担当する。

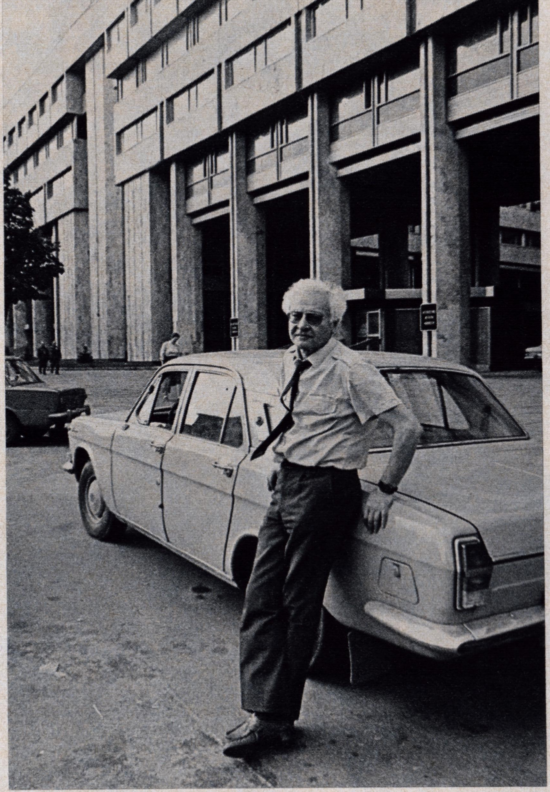


第12回青年学生祭に参加する世界の仲間を首を長くして待つモスクワの若者たち

モスクワっ子のモノローグ

私のモスクワ

アレクサンドル・フラトキン



アレクサンドル・フラトキン（ノーボスチ通信社の建物の前で）

読者の皆さん、まず自己紹介させていただこう。私の職業はジャーナリスト。モスクワに60年も住んでいるので（もっとも4年は軍隊で、もう4年は東京で勤務したが）皆さんのガイドになる資格があると思う。当然のことながら多少私事にも触れるが、どうか悪しからず。

もうすぐ7月末に、世界じゅうのいろいろな国の青年男女が第12回世界青年学生祭に参加するためモスクワにやってくる。そこで、その壮大な若者のフォーラムが催されるモスクワのことを、かなりの紙数を費やして（といっても雑誌の記事だから限度はあるが）、皆さんに紹介したいと思う。

では本題にはいって、昔から言われる「なにが」（What）、「だれが」（Who）「どこで」（Where）、「いつ」（When）「なぜ」（Why）の五つのWに答えてみることにしよう。

モスクワはソビエト社会主義共和国連邦の首都である。正確な地理的位置は北緯55度45分、東経37度37分、いわゆる東ヨーロッパ平原の中心にある。モスクワからソ連の西の国境まではほぼ一二〇〇km、東の国境までの距離は実に一万二〇〇〇kmにも及ぶ。

モスクワの気候はまあまあだろう。学問的に言えば、モスクワの気候は穏やかな大陸性気候で、数字から見てもそれが分かる。一番寒いのは1月で、平均気温はマイナス10・2度C、一番暑いのは7月で、平均気温はプラス18・1度C。最高気温と最低気温はそれぞれプラス37度C、マイナス42度Cである。

モスクワ市民は一九七二年の夏をいつまでも忘れない。煙が地面すれすれにたなびいていた。モスクワの近郊地域では暑さと、雨が全然降らなかったために、森や泥炭地で火事が起こったのだ。気温が40日間25度を越え、そのうちの23日間は30度を越えた。

私は一九四〇年の冬に猛威をふるった寒さをよく覚えている。前述の最低気温――マイナス42度を出したのはこの時である。私たちはほぼ半月登校しなかった。それほど寒かったのだ。だいたい、きびしい寒さは、安定するとそれなりに気持ちよいものだと言うが、モスクワでは11月末から3月なかばまでそれが続く。雪もたっぷり降る。スキーやスケートを楽しむモスクワっ子が多いのも偶然ではない。

水浴や魚釣りの場所もふんだんにある。昔はモスクワ市内を流れる川は一二〇もあったが、モスクワが発達するにつれて、その川の大半は地下の暗渠を流れるか、ひとりでに干上がってしまった。だが、そのまま残った川もたくさんある。その筆頭がモスクワ市をくねくねと曲がりながら横切っているモスクワ川で、川幅はあまり広くないが、水量が多く、深いので、船舶の航行が可能である。最近数年のあいだに、文字どおり都心のクレムリン河岸通りで釣り糸を垂れる人の姿をいつも見るようになった。補足しておくと、モスクワには五〇〇以上の池がある。

モスクワは緑が非常に多い都市である（緑地は住民ひとり当たり約20平方m）。市内に一〇〇ちかい公園、八〇〇以上の辻公園や遊歩道があり、おびただしい種類の鳥が住みついている。またモスクワ周辺の森からヘラジカ、キツネ、ウサギ、イノシシまでもが市内に迷いこんでくることもめずらしくない。

モスクワの人口は八六〇万。就業人口のほぼ半分が労働者、ほぼ20%が芸術・研究関係者である。おもしろい数字を二、三あげると、一世帯の平均人数は3・2人、それにモスクワっ子の圧倒的多数（93%）は家族と同居している。悲しい統計もある。第2次世界大戦中に多くの男性が死んだ結果、男性一〇〇〇人にたいして女性は一二七五人と、多いのである。

モスクワの歴史について少し。モスクワとその周辺地域から、紀元前三〇〇〇―二〇〇〇年の人間の住居跡が発見された。私たちがモスクワと呼んでいる町は、その昔はもちろん小さい町だったが、11世紀の終わり頃、現在のクレムリンとその近くのホテル「ロシア」がある場所に出現した。モスクワについての記述が初めて現れるのは一一四七年のことで、私たちはこの年をモスクワの歴史の始まりとしている。「モスクワは一日にして成らず」という諺がある。文字どおりの意味としても、実際にモスクワはたいへんな困難を冒して建設されたのである。ユーリー・ドルゴルーキー公（モスクワの開祖と考えられている）がモスクワの周囲に木の城壁と壕をめぐらし、町の規模を数倍に広げ、現代風にいえば、町の整備をすすめ始めたのも束の間、一二三七年にモンゴルのタタール汗国の攻撃を受け、無残に破壊された上、焼きはらわれてしまった。なにもかも最初から始めねばならなかった。比較的短期間で町は再興し、独立したモスクワ公国の中心になった。ところがほぼ一五〇年後、タタール人は再びモスクワを襲って、またもや破壊炎上させてしまった。

15世紀の末、モスクワはロシア国家の首都になった。現在までだいたいそのまま残っているクレムリンが建てられたのはこの時である。17世紀の半ば頃にはモスクワは欧州でも最大の首都のひとつになっていた。

一七一二年ロシア皇帝のピョートル一世は首都をペテルブルグ（現在のレニングラード）に移したが、モスクワはロシアでもっとも重要な経済・商業・文化の中心としてとどまった。それからちょうど一〇〇年後の、ロシアにとっては劇的であり壮烈な年でもある一八一二年、ほとんどからっぽになったモスクワにナポレオン軍が入ってきた。当時の人口二七万五〇〇〇のうち残留したのはわずか一万、そのほかは撤退したロシア軍の部隊とともに首都を去った。フランス兵は住宅、教会、倉庫、商店を略奪し、全市が火の海に包まれた。フランス軍は力尽きて弱り、軍紀が乱れてしまった。かつては偉大だったナポレオン軍の不名誉な退却がここから始まった。

もう一〇〇年跳びこえることにしよう。一九一七年は偉大な10月社会主義革命の年、モスクワ発達史上の新世紀はこの年から始まる。一九一八年3月11日、V・I・レーニンを首班とするソビエト政府がこの地に移った。モスクワは世界最初の社会主義国家の首都となったのである。

それから25年、モスクワは嵐のようなテンポで住宅、工場、地下鉄、学校、病院、大学を建てつづけた。

……一九四一年6月18日、卒業ダンスパーティがすむと、私たちは騒々しくかたまりながら学校から夜明けの静かな町へ繰り出して、赤の広場へ行き、しばらくして黙ってたたずんでから、モスクワ川の方へ降りた。川岸の欄干に肘をついて、さざ波ひとつない、うす赤い水面を眺めながら、6月22日の日曜日に郊外へ行こうということに話がまとまったのだ。

ところがその6月22日、街頭の拡声器と民家のラジオから「戦争だ」という叫び声がひびきわたったのである。そして間もなく商店のショーウインドーは砂を入れた袋で隠れ、6月の明るい夜には阻塞気球がいくつもモスクワの上空に浮かび、通りを横切って対戦車防杭が埋め込まれた。

1週間後、私は多くの高学年生と一緒に西へ三五〇km離れたスモレンスク近くに対戦車壕を掘りに行った。1カ月ののちきびしい緊張下のモスクワへ戻った私は数日後に出征したのだった。

一九四一年10月、ファシスト・ドイツ軍部隊はモスクワの近くまで進出することに成功した。第2次世界大戦最大の会戦のひとつが始まった。12月5日、ソビエト軍は反攻に移り、敵は一九三九年第2次大戦の開始いらい初めて惨たんたる敗北をモスクワ近郊の野でなめたのだった。世界は、ドイツ軍不敗の神話はもはや存在しないことを知った。ファシズムは粉砕され得るし、粉砕されたのである。

長い4年間の戦争が終わった一九四五年の5月9日、数千人のモスクワ市民とともに私は赤の広場に立ち、顔をあげて、勝利を祝う花火で美しく染まった夜空をうっとり眺めていた。私たちは我知らず笑っていたが、両眼からは涙が幾筋も流れ落ちていた。

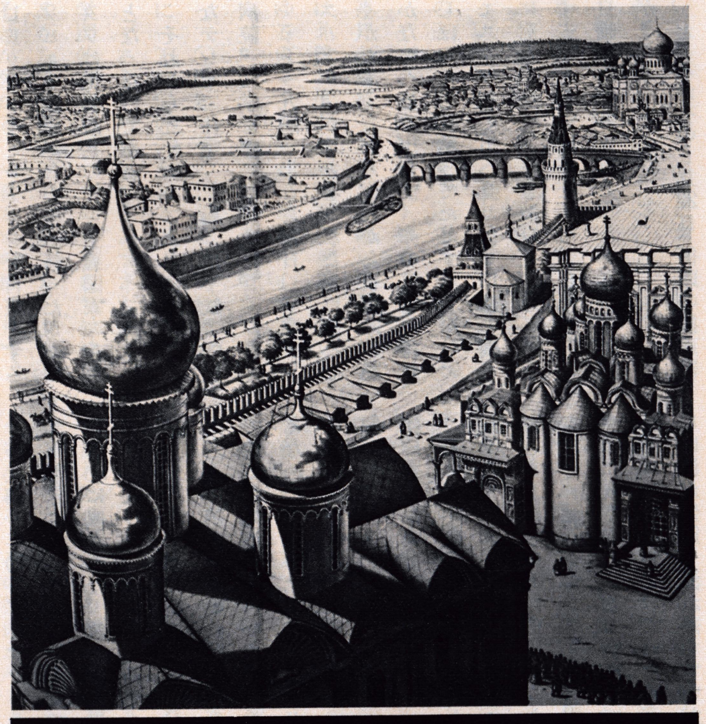
モスクワっ子のモノローグ

クレムリン

アレクサンドル・フラトキン

クレムリン、特にモスクワのクレムリンと言う場合、その言葉あるいは概念は多様な意味を持っている。ロシア語の辞書によれば、クレムリンとは城塞のことであり、城壁で囲まれた集落のことである。放射・同心円状に広がるモスクワの地図の上では、クレムリンはその中心であり、核である。歴史と芸術の観点からすれば、それは趣味と才能において非の打ちどころのない建築アンサンブルであり、ロシア・ソビエト国家の決定的な諸事件の目撃者である。政治的な意味では、ソ連およびその最高権力と同義語であり、ソ連最高会議幹部会令には、その左下隅に「モスクワ、クレムリン」の文字が添えられるのがふつうである。

クレムリンについての話は、まずそ



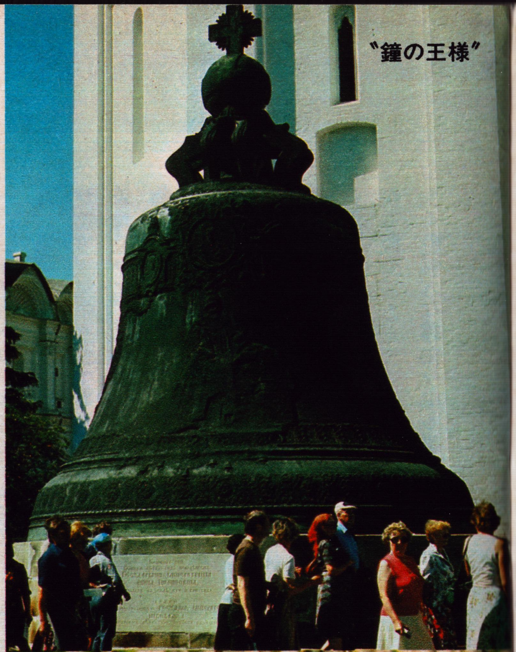
イワン大帝の鐘楼から見たクレムリンとモスクワ川
（19世紀後半の版画から）



現在のクレムリンとモスクワ川。手前左がウスペンスキー寺院、右がブラゴベシチェンスキー寺院、その後ろが大クレムリン宮殿とボドブズボドナヤ塔。



スパスカヤ塔



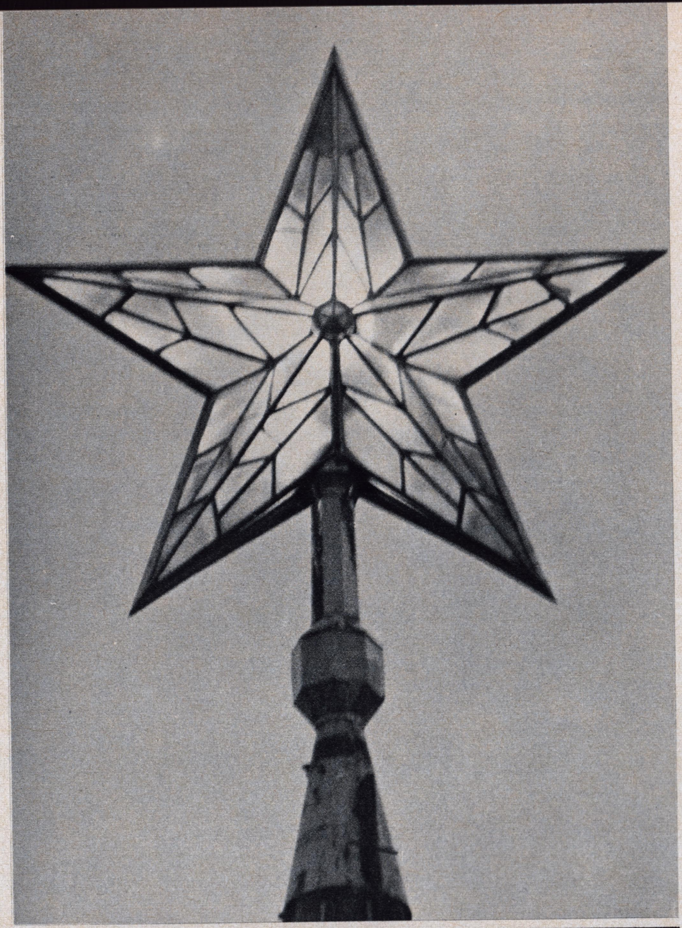
〝鐘の王様〟



モスクワの春



〝大砲の王様〟



塔の先端に輝くルビー色の星

の歴史から始めよう。モスクワが誕生したのは一一四七年だと考えられている。当時クレムリンは、頑丈な丸太の柵をめぐらした木造の要塞だった。

約2世紀後、モスクワ大公ドミトリー（のちにドン河畔のクリコボの戦いでキプチャク汗国の軍を破ったことによりドンスコイと呼ばれる）の時代に、白い石造りの要塞が建てられた。

〝白い石造りのモスクワ〟と言われるゆえんである。大体において、今日われわれが見ているような赤いレンガ造りの18の塔ができたのは、15世紀末である。城壁は長さ二二三五m、高さ5mから19m、厚さ3・5mから6・5mに及び、その上には細い狭間を持つ〝ツバメの尾〟型の鋸壁が一〇四五築かれていた。

次は塔について。とはいえ、全部について語ることはできない。主なもの——ソビエト時代に先端にルビー色の星を取りつけられた塔についてだけ語ろう。夜になると輝くこれらの星の大きさは、芒の長さが約4m、重さは約1t。塔の中で最も荘厳なのは、赤の広場に面するクレムリンの正門——スパスカヤ塔である。この塔は大時計があることでも有名だが、時計の直径は6・12m、長針は3・28mもある。

レーニン廟をはさんでスパスカヤ塔とは反対側にあるのがニコリスカヤ塔である。この塔は一八一二年の祖国戦争のさい、退却するナポレオン軍によってひどく壊されたが、4年後にはすでに有名な建築家オシプ・ボベによって再建されている。

トロイツカヤ塔。クレムリンで最も高い塔で、星まで入れると地上80mある。この塔は橋によってずんぐりした奇妙な形のクタフィヤ塔と結ばれている。一九一八年3月12日、トロイツキー橋を通ってトロイツカヤ塔の門からレーニンがクレムリンに入った。クレムリンはソビエト政府の所在地になった。

ボロビツカヤ塔はモスクワの最も古い場所——ボロビツキー丘に立っていることで有名だ。15世紀の建立である。

そしてボドブズボドナヤ塔。いままで紹介してきた四つの塔とちがって、この塔には門がない。塔のわきに掘られた井戸から塔の上まで水が揚げられて、それが鉛管を通じてクレムリンに供給された。この水道が作られたのは17世紀の三〇年代である。

クレムリン見学は、寺院が集中しているソボルナヤ（寺院）広場から始めるのがいいだろう。まずウスペンスキー寺院。五つの金色のネギ坊主を戴く、重厚でいながら軽快なこの寺院は、実は〝2代目〟である。〝先代〟のウスペンスキー寺院（一三二六年建立）は一四七四年3月20日から21日にかけての夜、モスクワには極めて珍しい地震に襲われ、崩壊した。ロシアの工匠たちとイタリアの建築家アリストテル・フィオラバンチの努力によって、寺院は一四七九年までに完全に再建された。ウスペンスキー寺院は多くの出来事を見てきた。厳かなミサ、ツァーたちの戴冠式、重要な法令の公布、高僧たちの葬儀……

その左手がブラゴベシチェンスキー寺院。ウスペンスキー寺院より10年ほどあと（一四八四―八九年）に建立されたツァー一族のための教会である。だが、この寺院が有名なのはそのためではない。むしろここの多数のイコン（聖像画）の中に、アンドレイ・ルブリョフ、フェオファン・グレク、プロホル・ゴロデツなど大家の作品があることで有名である。

クレムリンの最も有名な建物の一つ——グラノビータヤ宮殿もソボルナヤ広場に面している。いままで述べてきた寺院とほぼ同じ年代（一四八七―九一年）に造営された。この宮殿内の当時のロシアで最大だった広間では、外

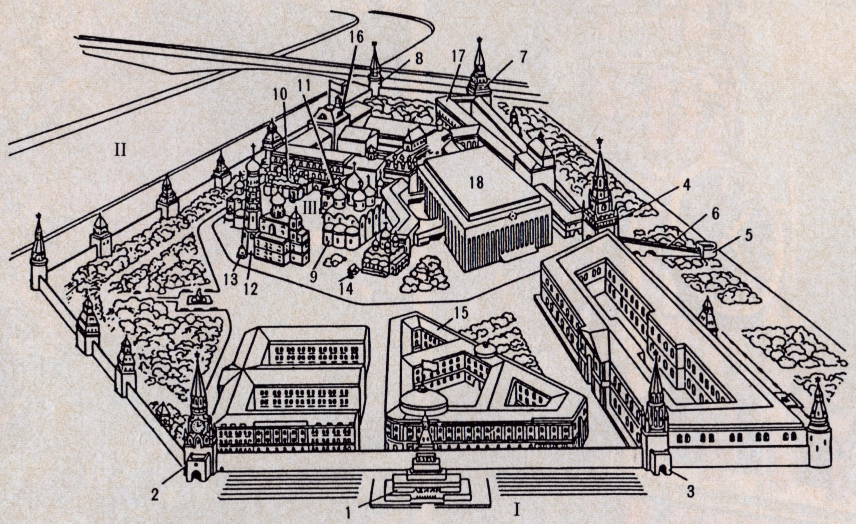
国の大使の接見、祝宴、重要な宮廷儀式が行われた。イワン雷帝（在位一五三三—八四）はタタール軍に対する勝利とカザン占領（一五五二年）を祝って、ここで3日間宴を張った。ピョートル一世（在位一六七二—一七二五）はここで、ポルタワ近郊の戦い（一七〇九年）でのスウェーデン軍に対するロシア軍の勝利を祝った。かつてツァーの玉座はこの宮殿にあり、ひげを生やした大貴族たちが壁ぎわのベンチに居並んだのである。グラノビータヤ宮殿は壁画と玄関の石彫がすばらしい。

現在では、ソボルナヤ広場の最高傑作はイワン大帝の鐘楼だ、というのが衆目の一致するところである。この八角形の塔は建設にほぼ1世紀かかり、ボリス・ゴドゥノフ（在位一五九八—一六〇五）治下の一六〇〇年に完成した。当時モスクワで最も高い（81m）建物で、見張り台でもあり、信号塔も兼ねていた。だから、これ以上高い建物を建てることは禁じられていた。

この鐘楼の足もとには珍しいものがある。その一つは、いわゆる〝鐘の王様〟で、高さ6・14m、重さ約二〇〇t、直径6・6mの巨大な鐘。ロシアの工匠たちが一七三五年に鋳造したものである。

この巨大な鐘から少し離れたところに巨大な大砲——〝大砲の王様〟がある。〝鐘の王様〟より一五〇年も前にアンドレイ・チョホフによって鋳造された。スパスカヤ塔の門を守るのがその目的だった。だが、実際には一度も発射されたことがない。世界のすべての大砲がそうだといいのだが！ さて、大きさは？ 重さ40t、口径89cm、砲身の長さ5・35mである。

クレムリンの見取り図



Ⅰ—赤の広場
Ⅱ—モスクワ川
Ⅲ—ソボルナヤ広場
1—レーニン廟
2—スパスカヤ塔
3—ニコリスカヤ塔
4—トロイツカヤ塔
5—クタフィヤ塔
6—トロイツキー橋
7—ボロビツカヤ塔
8—ボドブズボドナヤ塔
9—ウスペンスキー寺院
10—ブラゴベシチェンスキー寺院
11—グラノビータヤ宮殿
12—イワン大帝の鐘楼
13—〝鐘の王様〟
14—〝大砲の王様〟
15—ソ連閣僚会議の建物
16—大クレムリン宮殿
17—武器庫
18—クレムリン大会宮殿

建築、絵画、工芸品……クレムリンの概念を構成するこれらすべてについて語ることは、とうてい不可能だ。まず、時間が足りない。それでも、いくつかのものについては、どうしても紹介せずにはいられない。

かつて元老院があった建物に一九一八年4月から一九二三年3月まで、レーニンが住み、そこで仕事をした。彼の執務室があった3階に、あまり大きくないフラットがある。そこはいま博物館になっており、世界各地から大勢の人が訪れる。元老院があったこの建物には、現在、ソ連閣僚会議が入っている。

クレムリンのもう一つの重要な建物は大クレムリン宮殿だ。モスクワ川の方から撮った写真には真ん中に写っている。19世紀の中頃に建てられたもので、ここでソ連の最高国家権力機関——ソ連最高会議が開かれる。ここから一度ならず、平和を守り、核戦争の脅威を回避し、軍備を縮小するために努力を強化しようという、諸国の政府や政党、国民に向けたアピールが響き渡った。

大クレムリン宮殿と同じ頃、武器庫の建物が造営された。武器庫（博物館）そのものは16世紀初頭に始まるが、いまではこのユニークな博物館には、装飾品や工芸品の傑作、極めて繊細な細工を施した銃器、甲冑、手の込んだ彫刻を施した盃や水差し、ロシアのツァーたちの王冠その他が集められている。

クレムリンのいちばん新しい建物は一九六〇—六一年に建設されたクレムリン大会宮殿である。ガラス張り白大理石造りのこの建物のメーンホールは六〇〇〇人を収容できる。名前が示す通り、ここでは共産党、労働組合、コムソモールの大会や大規模な国際会議が開かれる。大会宮殿は別名、劇場宮殿とも呼ばれ、ボリショイ劇場が常時公演している。

このようにクレムリンは多面的であり、ユニークであり、忘れがたい。晴天につけ、雨天につけ、喜びにつけ、悲しみにつけ、クレムリンは私にとって、いやすべてのソ連人にとって、唯一の、神聖な、何ものにも比べがたい場所なのである。



モスクワ川から見たクレムリン。正面中央がボドブズボドナヤ塔、その後ろが大クレムリン宮殿、右端の高い塔がイワン大帝の鐘楼。

モスクワっ子のモノローグ

赤の広場

アレクサンドル・ブラトキン



赤の広場。中央がレーニン廟、
左手前が聖ワシリー寺院。

恐らく、どこの国の首都にも、ということはつまり、どこの国にも、それぞれメーンの（主要な）広場があるに違いない。もちろん、モスクワにもそういう広場がある。その広場は「赤の広場」と呼ばれている。この広場は二重の意味でメーンである。第一にそれはクレムリンに接して首都の中心部にある。第二に最も重要な行進や式典はこの広場で行われることになっているからだ。

赤の広場は私個人にとってもメーン広場だ。

一九二八年、母に手を引かれて私はここへ軍事パレードを見にきた（当時私は4歳になったばかりだった）。広場を剣を手にした勇ましい騎兵たちが全速力で駆け抜け、支え銃をした歩兵たちが厳しく行進し、通信兵たちが自転車に乗って進み、小型装甲車のエンジン音が広場に響き渡った。

それから30年余り後、赤の広場のメーデーのデモに私は自分のやはり4歳になる娘を肩車に乗せて連れていった。それは私にも娘にも面白く愉快な体験だった。

一九四五年5月9日、大祖国戦争におけるソ連国民の勝利の日、私はまだ軍服姿で赤の広場のモスクワ市民の人ごみにまじって、打ち上げられる花火を歓喜して見上げ、明るく照らしだされたソ連国旗が夜空に高くひるがえるのを見つめた。

一九四五年6月24日の赤の広場のことも鮮やかに記憶に残っている。レーニン廟のそばにヒトラー軍の軍旗が投げ出されたあの勝利のパレードには、私も各方面軍編成連隊のある隊列の中にいた。

一九六一年4月14日のこともどうして忘れられよう。数千人の大喜びするモスクワっ子たちと一緒に私は赤の広場で夢中になって、「ガガーリン、ガガーリン、ガガーリン！」と叫んでい



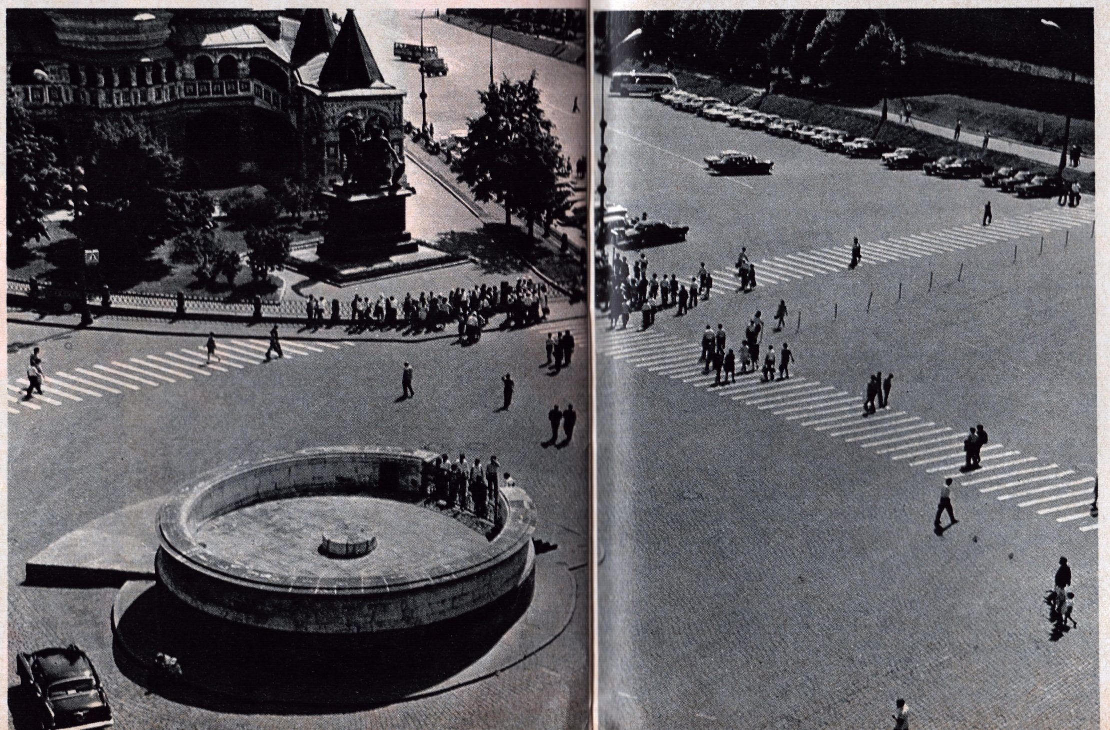
上　クレムリンの塔から見た聖ワシリー寺院。その右手に見えるのは〝ロシア〟ホテルとモスクワ川。



右　歴史博物館（この後ろが赤の広場）



左　ミーニンとポジャルスキーの像



下　高台（ロブノエ・メースト）の遺構



右　5月1日のメーデーと11月7日の10月革命記念日には赤の広場は大勢の人波で埋まる。

た。彼はこの日の2日前、地球人として初めて地球の周囲をまわる宇宙飛行を成しとげたのだった……

　歴史が物語るところによると、首都のこの最も重要な広場は15世紀の90年代に形成され、当時は市場を意味する〝トルグ〟と呼ばれていた。しかし、16世紀になるとこの広場はもう儀式用の広場になり、さまざまな儀式が行われ、ツァーの法令が布告される場所になった。17世紀後半には、この広場は〝美しい〟という意味で「クラースナヤ」（赤い、赤の）広場と命名された。

　確かに、この広場は美しい。広場の中央に立って（車の交通はここでは禁止されているので）、周囲を見てみよう。私たちの真ん前には三つの塔が立つクレムリンの城壁がある。左がスパスカヤ塔、中央がセナツカヤ塔、右がニコリスカヤ塔である。セナツカヤ塔の前にレーニン廟がある。レーニン廟については特に触れておく必要がある。

　一九二四年1月21日のレーニンの死から数日後、仮の木造の墓が建てられた。この墓はやがて廟に代えられたが、やはり木造だった。そして一九三〇年に建築家アレクセイ・シューセフの設計で、現在私たちが目にしている赤い花崗岩と黒い曹灰長石の直線的ですっきりした形の廟が建設された。廟の入口の第一哨所には1時間ごとに交替する儀杖兵が昼も夜も立っている。儀杖兵の交替の2分45秒前、スパスカヤ塔の門から衛兵司令と二人の歩哨が出てくる。一歩一歩規則正しい、しっかりした足取りで彼らは赤の広場を進んでくる。クレムリンの大時計の鐘が響きわたると同時に、新しい儀杖兵が廟の入口に不動の姿勢で立つ。

　レーニン廟の背後は革命墓地になっている。クレムリンの城壁のそばの墓にはソ連の卓越した人々、国際共産主義・労働運動の偉大な活動家たちが葬られている。

　クレムリンに向かって赤の広場の左手には、モスクワについての本を手にしたことのある人なら、すぐにそれと分かる建物がある。これが聖ワシリー寺院、正式の名称ではポクロフスキー大寺院である。この寺院は16世紀の中頃ロシアの建築師バルマとポストニクによって建てられた。ロシアの名匠たちのこのたぐいまれな作品は、時には装飾過剰なほど何とも手が込んでいるが、と同時に実に優美な建物だと私は思う。大きなテント形の屋根の大教会を囲んでネギぼうず形の屋根の小さな教会が正八角形に配されている。すべての建物は回廊でつながっている。いま聖ワシリー寺院は歴史の博物館になっている。

　聖ワシリー寺院の前に記念碑が立っている。花崗岩の台座には、「市民ミーニンと公ポジャルスキーにロシアは感謝する　一八一八年夏」と記した青銅の銘板がはめこまれている。この二人の人物は17世紀の初め、人民義勇軍の先頭に立ち、モスクワと全ロシアをポーランドの侵略から救った（記念碑の作者はイワン・マルトス）。

　聖ワシリー寺院の近くにはもう一つ古い建造物――高台（ロブノエ・メースト）の遺構がある。これが作られたのは四五〇年前だが、今のような形になったのは18世紀の80年代。かつてこの石造りの高台からツァーや総主教たちが民衆に語りかけ、また、政府の命令や勅令が布告された。

　さてこんどは、クレムリンに向かって赤の広場の右手、聖ワシリー寺院の反対側を見ていただこう。赤レンガ造りの、今なら当然、装飾過剰と言われそうな、一般の建築から見れば風変わりな建物がある。この建物には、むしろ寺院建築にふさわしい小さな塔やさまざまな装飾がわんさと付いている。厳しい評価を下す人たちはこの建物に対して懐疑的で、これは疑似ロシア様式だと決めつけている。お前の意見はどうなのかとおっしゃるなら申し上げるが、私はこの建物が好きだ。ありきたりでないこと、めかしこんでいること、そして私たちには時として不足がちなある種の空想性でこの建物は私の気に入っている。

　この建物は一〇〇年以上も前、歴史博物館として建てられた。この博物館には現在、四五〇万点のさまざまな資料が所蔵されている。もちろん、これだけのものを一度に陳列するには一〇〇〇以上もの展示室が必要だろうから、その大部分は倉庫に保管されている。しかし、現に陳列されているものだけでも、古代から現代までのソ連諸民族の歴史を雄弁に物語ってくれる。

　歴史博物館に少し遅れて、赤の広場をはさんでクレムリンの反対側に、広場の長さいっぱいに、アーケード式商店街の入る建物が建てられた。このどこかクレムリンとも、歴史博物館とも似たところのある建物は、どのモスクワ市民にも、そして恐らくはモスクワを訪れたどの外国人にも知られている。現在ここにはソ連最大の商店――グムという略称で知られる国立百貨店が入っているからだ。この建物は総面積約二万四五〇〇平方mの3本の長いアーケード式の売り場から成っている。グムには毎日三〇万人以上が買い物に来る。

　というわけで、私たちは赤の広場を取り巻いている建造物を全部見たことになる……

　ソ連には、赤の広場ほど知られている広場はほかにない。最低でも年2回、すべてのソ連国民はテレビでこの広場を見ることになる。5月1日のメーデー（勤労者の国際連帯デー）には何万人ものデモ隊がこの広場を通るし、私たちが10月社会主義大革命の記念日を祝う11月7日には軍事パレードに続いて沢山の人の行列がこの広場を行進する。

　ことしは5月9日にも、大祖国戦争勝利40周年を記念するパレードがここ、赤の広場で行われた。

モスクワっ子のモノローグ
2本の環状道路

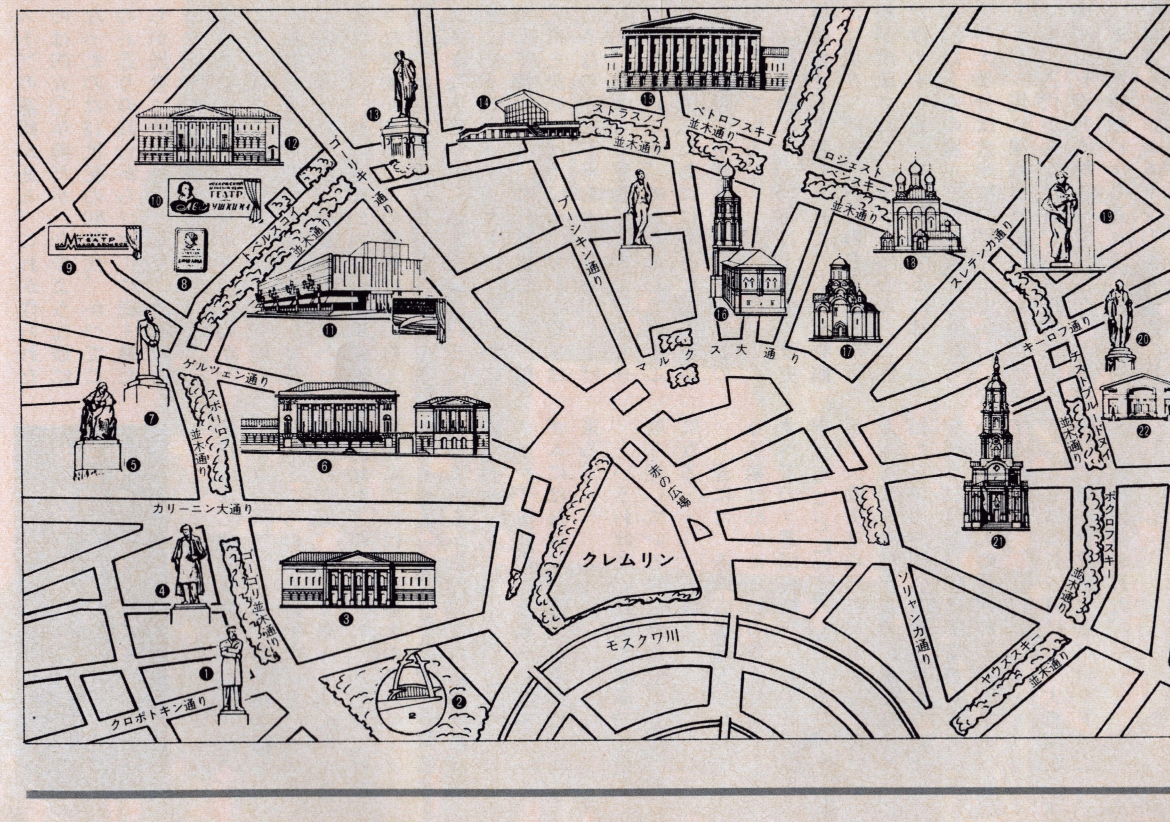
アレクサンドル・フラトキン

環状道路と放射道路——都市建設者なら放射・環状配置と言うところだ。モスクワはまさにそういう形で歴史的に形成されてきた。モスクワの中心のクレムリン（後には赤の広場）の周りに昔一つの環ができていて、その後さらにもっと大きな環、ついで第三の環ができた。環ができたのは偶然ではなく、初めそれはレンガや土のとりででであったが、それらはやがて敵の来襲を防ぐ防御的な意味合いを失い、それとともにとりで自体も姿を消し、あとには通りだけが残った。

もう少し歴史を振り返って、少しばかり詳しく見ることにしよう。クレムリンのレンガの壁は15世紀末に出来上がった。しかしモスクワは成長し、拡大し、境界をおし広げた。16世紀になっていわゆるベールイ（白い）都市の周りに延長9㎞余りのレンガの壁が構築された。それが今のブールバール環状道路である。

ブールバール環状道路

①フリードリヒ・エンゲルス像　②「モスクワ」プール　③ソ連美術家同盟展示ホール　④ニコライ・ゴーゴリの銅像（N・トムスキー作）　⑤ゴーゴリ銅像（N・アンドレーエフ作）　⑥東方諸民族芸術博物館　⑦K・チミリャーゼフ（ロシアの科学者）の銅像　⑧ロシアの女優マリア・エルモロワ博物館　⑨マーラヤ・ブロンナヤのドラマ劇場　⑩プーシキン劇場　⑪モスクワ芸術座の新館　⑫ゴーリキー文学研究所　⑬アレクサンドル・プーシキン像　⑭「ロシア」映画館　⑮18世紀の建築記念物（M・カザコフ設計）　⑯ブイソコ・ペトロフスキー僧院（17世紀の建物）　⑰ロジェストベンスキー大寺院（16世紀）　⑱スレテンスキー僧院（17世紀）　⑲ナジェジダ・クルプスカヤ（レーニン夫人）の銅像　⑳アレクサンドル・グリボエドフの銅像　㉑メンシコフ・タワー（18世紀初め）　㉒ソブレメンニク劇場







▼並木通りでは人も犬もくつろいだ気分になる。

プーシキン広場の映画館"ロシア"









右上右　トベルスコイ並木通りにあるモスクワ芸術座の開演前
右上左　プーシキン広場のイズベスチヤ紙の社屋
右下　モスクワの並木通りは昔から格好のデートの場所だ……
上　トベルスコイ並木通りに造られた子供の遊園地

16世紀ごろは延長16㎞の土塁と厚い木の壁がモスクワを取り巻いていて、木の壁の向こうは深い堀になっていた。いまそれが道幅の広いサドーボエ環状道路になっている。

18世紀の中ごろさらに一つ、延長約40㎞のカメル・コレジスキー土塁が現れ、かつてはここで税関検査が行われた。いまこの環状線は徹底的に改修されており、多くの陸橋や立体交差が設置されて、モスクワの多くの地区を最短距離で結ぶ高速道路となろう。

環状道路がモスクワの中央部から出る放射道路を横切る場所には、かつて門があった。これらの門はなくなって久しいが、いまもスレテンスキエ門、ニキツキエ門、ペトロフスキエ門というふうに名前だけが残っている。

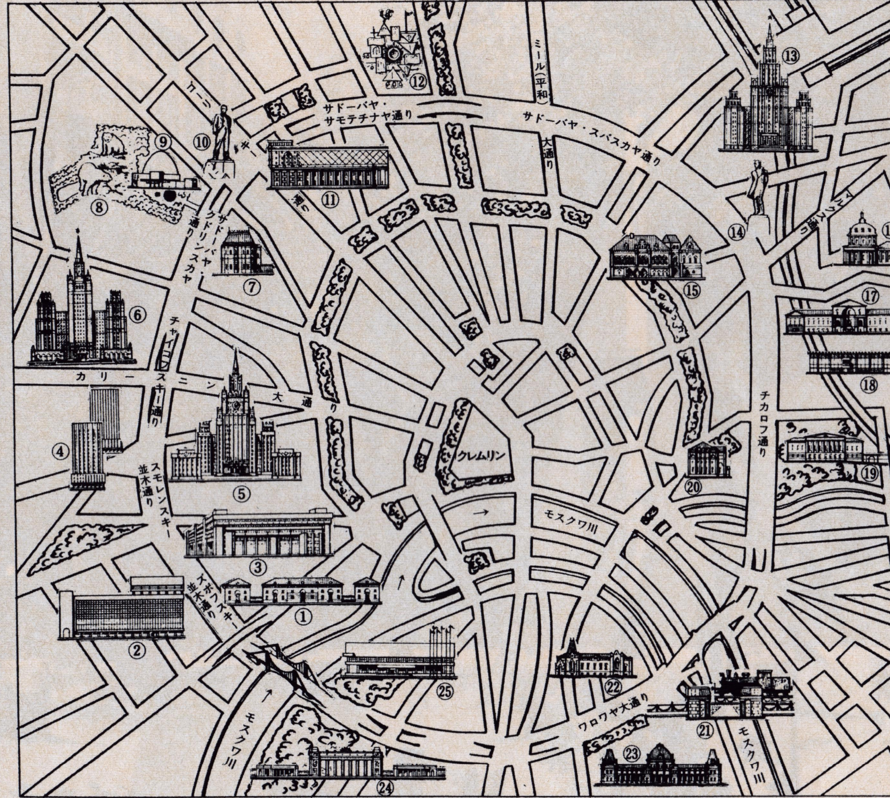
そして最後が一九六二年に建設された一〇九㎞のモスクワ環状自動車道路である。いまこの道路は一応モスクワ





左上　サドーボエ環状道路のスモレンスカヤ広場にあるソ連外務省

左下　夏のカフェテリアでくつろぐ若者たち



の境界線と見られている。一応と言ったのは、ところどころでモスクワ市のかなりの数の新設団地がこの環状線の外にはみ出しているからだ。

さて二つの環状道路を通ってみることにしよう。まずブールバール（並木）道路から始めるとして、ざっと道筋を紹介すると、ところどころに広場のある並木通りの帯がまん中に延びていて、その左右に一方通行の2車線がある。並木通りは年齢を問わずどの市民からも好かれており、日中は子供づれの母親や新鮮な空気を吸いに来たお年寄りが多く、夕方ごろからは若い恋人たちが多くなる。

ブールバール環状道路は厳密に言うと、環状線ではなくてむしろ蹄鉄形であり、両端がモスクワ川につながっている。われわれは散策をどの並木通りからでも始めることができる。たとえばゴーゴリ並木通りからでもよい。この通りは19世紀のロシアの大作家ニコライ・ゴーゴリの名をつけたもので、通りがアルバート広場に出たところにゴーゴリの銅像がある。

アルバート広場についてもちょっと詳しく触れておきたい。ここはモスクワで最も古い広場の一つで、一四三九年にはタタールの軍隊がここまで進出して退却した。

アルバート広場は大きく変貌したが、広場を起点とするアルバート通りとアルバート横町は、古いモスクワのシンボルとも言うべき存在で、私のような50過ぎの世代の市民はここにノスタルジアを抱いている。

16、17世紀にアルバート地区に住んでいたのは、手工業者だった。アルバート横町にはカラシヌイ（白パン）、フレブヌイ（パン）、スカテルトヌイ

サドーボエ環状道路

①スターソフの食糧倉庫（19世紀の重要建築物）　②プログレス出版社　③ズボフスキー並木通りのノーボスチ通信社ビル　④ベオグラード・ホテル　⑤ソ連外務省ビル　⑥蜂起広場の高層アパート　⑦チェーホフ旧宅博物館　⑧モスクワ動物園　⑨モスクワ・プラネタリウム　⑩詩人マヤコフスキーの銅像　⑪チャイコフスキー・コンサートホール　⑫中央人形劇場　⑬レールモントフ広場の高層ビル　⑭ロシアの大詩人レールモントフの銅像　⑮大貴族ウォルコフの邸宅（17世紀の建築）　⑯キリスト昇天節教会（M・カザコフ設計―18世紀の重要建築物）　⑰ラズモフスキーの宮殿・屋敷（19世紀）　⑱クールスク駅　⑲宮殿・屋敷（19世紀）　⑳東方諸民族芸術博物館　㉑レーニンの「葬送列車」博物館　㉒バフルシン記念演劇博物館　㉓パベレツ駅　㉔ゴーリキー中央公園　㉕美術家中央会館

「今日のソ連邦」昭和60年7月15日号（第28巻・第14号・通巻635号）付録

☆党の経済政策の根本問題

——科学技術進歩促進の諸問題に関する会議でのM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の報告要旨（1985年6月11日）

☆ABM条約は戦略軍備拡充競争を阻む障壁

ソ連邦元帥、ソ連軍参謀総長、ソ連第一国防次官　S・アフロメーエフ

「今日のソ連邦」1985年第14号付録



モスクワ市民に愛される憩いの場所——ゴーリキー中央公園

サドーボエ環状道路をはさんで、ゴーリキー中央公園入口の反対側に美術家中央会館がある。



ソ連がABMのために防空手段の実験を行っている、それと関連して条約で禁止されているソ連領土をカバーするABMシステムの開発を準備している、といった対ソ〝非難〟も、明らかにそれと同じ目的を狙ったものだ。

ソ連では、防空手段の基地をも含め、領土をカバーするABMシステムの開発準備はいっさい行われていない。防空システムではABM条約に違反するような作業はいっさい行われていない。

ソ連は、ABM条約を守っていないという米国のいわゆる対ソ〝非難〟はデッチ上げであり、現実に合致していないと再三言明してきた。われわれはこの条約の厳密で無条件の順守を支持しており、それをなしくずしにする事態を招くこと、ましてや米国がやっているように、宇宙軍事化の道に立ち、条約実施の見通しそのものを危ういものにすることは許せないと考えている。

ABM条約をめぐるワシントンのかけひき、条約掘りくずしの責任をソ連に転嫁し、世論の目に自分を条約に盛り込まれた条項の守り手のようにさえ見せかけようとする試みは、ABM条約がその重要性と意義を保ち続けており、依然として核軍拡競争の道に立ちはだかる障害となっていることを裏付けている。できあがっている世界の戦略的均衡を破壊し、ソ連に対する軍事的優位を獲得しようとしている西側の軍国主義層は、この障害を取り除きたがっている。

ソ連は――このことはソ連指導部が一度ならずきわめて明確に言明してきたが――軍事的優位を求めていないし、自国に対するそうした優位を――地上でも、宇宙でも、宇宙ごしにも――許しはしない。S・L・ソコロフ・ソ連国防相・ソ連邦元帥がタス通信記者の質問に対する回答の中で強調したとおり、「攻撃用宇宙兵器の開発は米国自体とその同盟諸国の安全の低下となって必ずはね返る」ことを、〝スターウォーズ〟の主唱者たちは忘れるべきではない。

◇

ソ連は、核軍備をはじめとする軍拡競争の停止をねばり強く一貫して求めている。この目的を達成する直接の道は、軍拡競争を宇宙に持ち込もうという挑発的なもくろみを捨てることである。攻撃用宇宙軍備が禁止され、すでに研究作業の段階でそれらの開発準備が停止されれば、核軍備の抜本的削減に広範な可能性が開かれよう。ソ連はすでに、戦略攻撃軍備の$\frac{1}{4}$の削減を提案した。宇宙が軍事化されなければ、さらに大幅な削減も実現可能だ。この問題を解決する別の道はない。ここでもABM条約のすべての条項を双方がもれなく遂行することが、重要な役割を果たす使命を担っている。

ABM条約の維持と絶対的順守は、核・宇宙軍備に関するジュネーブ交渉における合意への首尾よい進展の保証である。ソ連共産党中央委書記長M・S・ゴルバチョフ同志が強調したように、軍拡競争と軍縮交渉を両立させることはできない。ソ連はそうした路線を助長しないだろう。ソ連の方は、軍拡競争に終止符を打ち、軍縮の事業を前進させるような具体的で相互に受けいれ可能な協定をジュネーブでねばり強く求めていくだろう。

（プラウダ、一九八五年6月4日号）

『今日のソ連邦』一九八五年7月15日号付録
発行人　加藤宣幸
編　集　ソ連大使館広報部
（郵便番号141・東京都品川区東五反田3―9―13・電話03―447・3536）
印刷・発行所　（株）新時代社
（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1―44・電話03―293・4881）

（テーブルクロス）、スタローブイ（食堂）、プロトニコフ（大工）、セレブリャヌイ（銀）といった町名が今も残っているが、これは昔の名残りである。

ゴーゴリ並木通りの向こうの次の並木通りはスボーロフ通りで、その入口に比較的大きな古い独立家屋がある。これがジャーナリスト中央会館で、われわれジャーナリストが会合や討論に使ったり、あれこれいろいろとだべったり、おいしい食事をする場所である。

さてニキツキエ門の広場を横切って、私の大好きな（おそらく最も有名な）トベルスコイ並木通りに入ろう。この通りは18世紀末につくられたもので、幅が広く、長さは約1㎞。モミジ、ニレ、シラカバにまじって樹齢二〇〇年のカシの木がある。この木はかつてここを散策した有名な詩人や作家――プーシキンとドストエフスキー、ツルゲーネフとレールモントフ、マヤコフスキーとエセーニンを覚えているに違いない。

トベルスコイ通りの端のプーシキン（旧ストラスノイ）広場には、一九五〇年までモスクワで最も有名な大詩人アレクサンドル・プーシキンの銅像があった。一八八〇年に彫刻家アレクサンドル・スペクシンが制作したもので、一九五〇年にプーシキン広場の改修のさい銅像は広場の反対側に移された。

トベルスコイ並木通りの両側の建物は名建築として有名であるだけでなく、それらを使っている入居者でも知られている。たとえばタス通信社、モスクワ芸術座などで、芸術座のほぼ反対側にはかつての有名な小劇場（カーメルヌイ）の後身のプーシキン劇場がある。この劇場の並びに庭園のある古い建物がある。一八一二年にロシアの偉大な革命家・民主主義者、作家であったアレクサンドル・ゲルツェンはここで生まれた。今ここはゴーリキー記念文学研究所になっている。

次の並木通りのストラスノイ通りは、何百年ものあいだ枝を張りめぐらした木々があって、どちらかというと、古い庭園に似ている。通りの幅は並木通りのなかのピカ一で、一二〇m以上もある。その通りの左側にある一軒の家のそばにちょっと立ち止まってみよう。この家はいくつかのわけがあって有名だ。第一のわけは、この家は18世紀の末に最も有名なロシアの建築家のひとりマトベイ・カザコフが建てたということ。第二は、19世紀の最初の10年、レフ・トルストイが『戦争と平和』のなかで触れたイギリス・クラブがこの家にあったということだ。現在、12本の柱廊のあるこの建物は市立外来病院になっている。

ロジェストベンスキー並木通り、この通りは私が子供の頃からなじんできた通りだ。非常に勾配が大きくて、スキーをするには持ってこいの長い坂があるので、私たち腕白小僧たちがそこで威勢よく滑ったものである。坂の上に上がるときは、ゆっくりとはうように上がる市電のバンパーにつかまった。

チストプルードヌイ並木通りは、ほかの並木通りと異なる独特のユニークな特徴がある。大きな池があって、夏は白鳥が泳ぎまわり、冬はスケートリンクになる。

残念だが、ここで並木通りに別れを告げて、もう一つの環状道路、サドーボエへ行くことにしよう。サドーボエを歩くのに時間が足りなくなると困るから、タクシーを飛ばして行くことにする。いまこの環状道路は幅60m、車線の多い幹線道路である。かつてこの環状通りの両側には庭園（サード）のある家が立っていたので、そこからサドーボエと呼ばれるようになったのだ。モスクワの住所案内に従えば、サドーボエ環状道路は17の通りと12の広場からできた切れ目のない鎖である。

その通りの一つ、ズボフスキー並木通りに、正確にはその4番地のビルに私は毎日午前9時頃出勤する。そのビルとは、ノーボスチ通信社のことである。この大きなビルができたのは比較的新しく、一九八〇年にモスクワ・オリンピックが開かれる前だった。ここにはオリンピック・プレスセンターが置かれた。

サドーボエ環状道路と、この環状道路に隣り合った通りは偉大なロシアの名前と結びついている。レフ・トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、レールモントフ（環状通りにある一つの広場にその名がつけられている）、チェーホフ（チェーホフ本人の言葉によると、この通りの「たんす」のような二階家に住んでいたことがある）、マヤコフスキー（その名の広場がある）、チャイコフスキー（サドーボエの隣の通りの一つにこの名がついている）、歌手のシャリャーピン（彼が住んでいた家が近く記念博物館になる）などだ。

サドーボエ環状道路に面して外務省と鉄道省の高層ビルが立っている。サドーボエにある広場の一つ、オクチャーブリ（10月）広場は全部が新築のビルから成っていて、いろいろな省がたくさんある。歴史的建築物といっても実にたくさんあるが、18世紀の末から19世紀の初め頃に建った優美な建物を一つだけ挙げておこう。この建物は現在ロシアのすぐれた外科医ニコライ・スクリフォソフスキーの名前を記念した救急医療研究所になっている。

まだまだ話すことはいっぱいあるが、読者の皆さんと一緒に2本の環状道路を歩いてすっかりくたびれたので、この辺で一息入れることにしよう。

モスクワっ子のモノローグ

2本の放射道路

アレクサンドル・フラトキン

こんどは放射状の通りを歩いてみよう。そのような通りは、主なものだけでも10本以上あるので、そのうちから2本だけ取り上げることにしよう。ゴーリキー通りとカリーニン大通りである（後者はモスクワ川を越えてクトゥーゾフ大通りになる）。

モスクワにも、他のいくつかの都市と同様に、昔からの伝統がある。なぜかある通り、あるいはある通りの一部区間が、市民の夜の散歩コースになっているのだ。かつてはクズネツキー・モスト通りとペトロフカ通りがそれだったが、やがてゴーリキー通りがそれに取って代わり、その地位を確立した。夕方ともなれば、ゴーリキー通りのクレムリンわきからプーシキン広場に至るまでの区間は、顔見知りとあいさつを交わしながらゆっくり散歩する数千人のモスクワっ子でにぎわう。15—17歳の少年だったころ、私たちもよくそこへ行ったものだ。

ゴーリキー通りはモスクワの中心から北西に、レニングラードの方へ延びている。だからその延長はレニングラード大通りと呼ばれ、さらにその先はレニングラード街道になる。かつてこの通りは狭くて曲がっており、トベルスカヤ通りと呼ばれていた。一九三〇年代に通りの根本的な改修が始まり、文豪ゴーリキーの名を冠することになった。現在ではほとんどすべての区間にわたって高層ビルが立ち並び、さまざまな商店の大きなショーウインドーが道行く人々を誘っている。

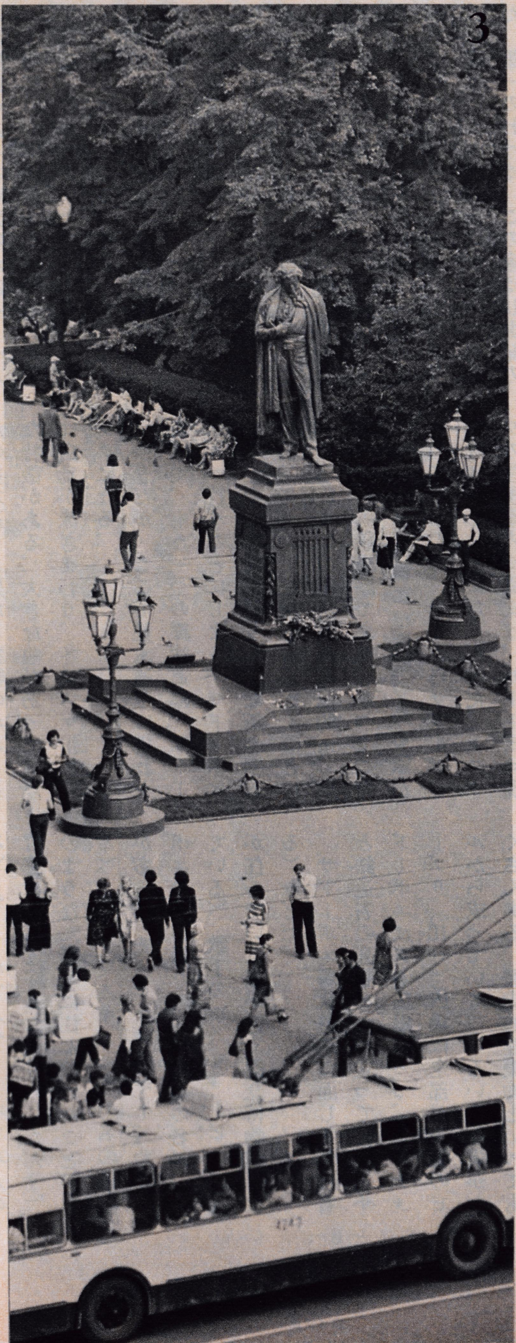
ゴーリキー通りの起点には、左手に古めかしい〝ナツィオナル〟ホテルがある。一九〇三年に建てられたこのホテルは長い間、モスクワでいちばん高



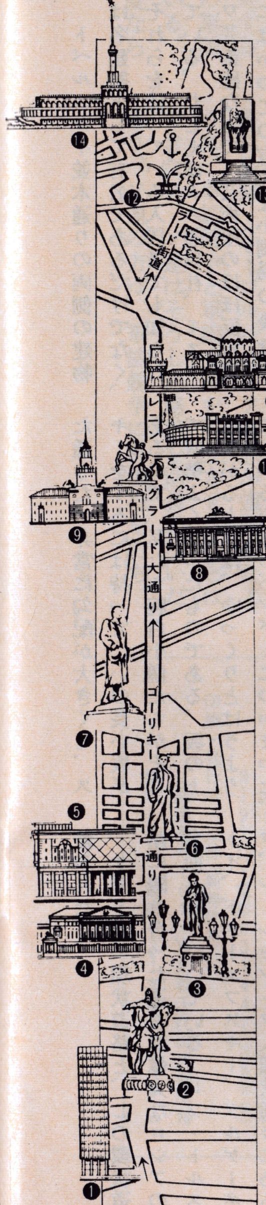
1



2



3



①〝インツーリスト〟ホテル
②ユーリー・ドルゴルーキー公の像
③プーシキン像
④革命博物館
⑤チャイコフスキー記念コンサートホール
⑥マヤコフスキー像
⑦ゴーリキー像
⑧〝ソビエツカヤ〟ホテル
⑨モスクワ競馬場
⑩〝ディナモ〟スタジアム
⑪ピョートル宮殿（18世紀造営）
⑫〝ディナモ〟水泳場
⑬友好公園
⑭ヒムキ河港



4



5

1　ソビエト広場から見たモスクワ市ソビエトの建物。中央の騎馬像はユーリー・ドルゴルーキー公。

2　〝ナツィオナル〟ホテル（手前）と〝インツーリスト〟ホテル（高い建物）、その後ろが中央電信局。ゴーリキー通りはここから始まる。

3　プーシキン広場のプーシキン像

4　マヤコフスキー像とボリシャヤ・サドーバヤ通り

5　ベロルシア駅前広場のゴーリキー像





級なホテルだと見なされていた。いまでも懐古趣味ファンに人気がある。その隣に新しい長身の〝インツーリスト〟ホテルが建てられた。

通りの同じ側に白い円柱の柱廊のある暗赤色の5階建てのビルがある。これがモスクワ市人民代議員ソビエト（市役所）の建物である。ここで人口八六〇万の巨大都市モスクワが運営されているのだ。一九五四年、モスクワ市ソビエトの正面のソビエト広場に、モスクワ市創建八〇〇年（一九四七年がそれに当たった）を記念して、創建者ユーリー・ドルゴルーキー公の記念碑が建てられた。

その次の広場がプーシキン広場である。この広場のことはすでに前項のブールバール環状道路のところで触れた。この広場は二つのことで有名である。その一つはモスクワっ子が大好きな詩人アレクサンドル・プーシキンの記念碑があること、もう一つは新聞や雑誌の編集局がここに集中していることである。ソ連最高会議幹部会の機関紙イズベスチヤ、ソ連労働組合の機関紙トルード、国際問題専門の週刊紙ノーボエ・ブレーミャ、最も人気の高い月刊文芸雑誌ノーブイ・ミールといった有名な出版物の編集局がここにある。

天才的な詩人を記念したこの広場でゴーリキー通りのもう一つの特徴を話しておこう。ロシア・ソビエト文学の







6　人でにぎわうゴーリキー通り

7　昼下がりの木陰で

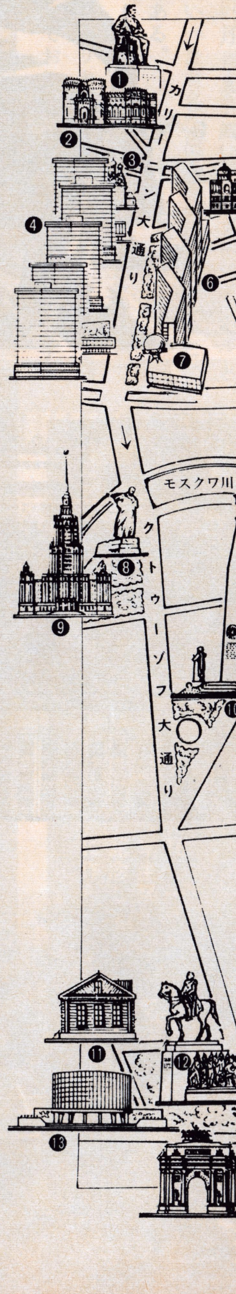
8　モスクワ市内でも釣り場には事欠かない。

9　レニングラード街道沿いの友好公園。市民の憩いの場として人気がある。

10　一九五七年に第6回世界青年学生祭がモスクワで開かれたのを記念してレニングラード街道沿いに作られた友好公園



①カリーニン像
②対外友好会館
③シメオン・ストルプキン教会（17世紀建立）
④高層アパート群
⑤レストラン〝プラハ〟
⑥高層官庁街
⑦レストラン〝ノボアルバツキー〟
⑧シェフチェンコ像
⑨〝ウクライナ〟ホテル
⑩モスクワ英雄都市オベリスク
⑪〝クトゥーゾフの百姓小屋〟博物館
⑫クトゥーゾフ像
⑬ボロジノ戦役パノラマ館
⑭凱旋門





大家の名を冠したこの通りには、ほぼ1㎞ずつ隔てて三人の記念碑（像）がある。アレクサンドル・プーシキン、ウラジーミル・マヤコフスキー、マクシム・ゴーリキーのそれである。
　マヤコフスキーの像もプーシキンのそれと同じく、詩人の名を取ったマヤコフスキー広場に立っている。プーシキン広場がマスコミと縁が深いとすれば、マヤコフスキー広場は舞台芸術と縁が深い。何しろマヤコフスキー広場には風刺劇場、モスソビエト劇場、チャイコフスキー記念コンサートホールが軒を連ねており、近くにはスタニスラフスキー記念ドラマ劇場がある。比較的最近まであと二つの劇場――ソブレメンニク劇場とオブラスツォフの人形劇場もここにあったが、現在は新しい建物に移っている。
　ゴーリキー通りはベロルシア駅わき





11　カリーニン大通りの対外友好会館
12　コメコンビルから見たカリーニン橋とクトゥーゾフ大通り（対岸右手が〝ウクライナ〟ホテル）
13　ボロジノ戦役パノラマ館とクトゥーゾフ像
14　クトゥーゾフ大通りにある勝利広場の凱旋門

の広場で終わるが、ここにゴーリキーの像が立っている。ベロルシア駅へはワルシャワ、ベルリン、パリ、ロンドン、ローマから列車がやってくるので、これらの国からやってきた外国人にとっては、この広場がモスクワに足を踏み出す最初の地となる。
　この広場から先はレニングラード大通り――遊歩道のついた何車線もある広い幹線道路で、やがてレニングラード街道となり、シェレメチェボ国際空港を経て六〇〇km先のレニングラードに通じている。
　もう一方のカリーニン大通りとそれにつづくクトゥーゾフ大通りは都心から西に向かう。右側の最初の建物にソ連最高会議幹部会の面会室がある。ここで長い間ミハイル・カリーニン（一八七五―一九四六）が訪問者を応対した。通りの名はこの人に由来する。カリーニンはレーニンの親しい同志で、一九一九年から全ロシア・ソビエト執行委員会議長、一九二二年からソ連邦中央執行委員会議長、一九三八年から一九四六年に死ぬまでソ連最高会議幹部会議長を務め、27年間にわたって国家元首の地位にあった。通りの反対側には国立レーニン図書館の巨大な建物がそびえている。
　カリーニン大通りにはモール風のお城を思わせるユニークな独立家屋がある。前世紀末、大金持ちの工場主モロゾフのために建てられたもので、貝殻模様あり、船のロープを模した円柱あり、透かし模様あり、"モダン"な要素ありで、建築には贅が尽くされている。まさにこの点がこの建物の魅力だろうと思う。現在この建物は対外友好会館になっており、そのことによっても外国人によく知られている。
　アルバート広場をすぎると一九六〇年代の初めに造成されたカリーニン大通りの新地区が始まる。一九六六年、パリ建築研究センターはこの新地区建設計画に対してグランプリを授与した。カリーニン大通りの約1kmにわたるこの地区は、全体として一つの建築アンサンブルを構成している。左側には2階建ての商店、喫茶店、レストランの帯を少し前に配置した25階建てのビル4棟が帆のように並び、建物の中に10ほどの省が入っている。右側には24階建てのアパートが5棟並び、やはり商店が道路に面して配置されている。
　カリーニン大通りはモスクワ川河畔の32階建てのコメコン（経済相互援助会議）ビルで終わる。半開きの本を立てたような形のこのビルの建設は一九六九年に完了した。
　カリーニン橋でモスクワ川を渡ると、ここからはクトゥーゾフ大通りである。右手には外国人によく知られている"ウクライナ"ホテル（一〇〇〇室）の高いビルがそびえている。おもちゃ会館、"ロシアのスーベニア"のようなモスクワっ子に人気のある店がたくさん並んでいる……
　ストップ。ここで私たちはいまでも歴史の息づかいが感じられる場所に近づいた。右手に青灰色のガラスが輝く巨大な（直径40m以上）円筒形の建物がある。この中に、一八一二年8月26日にモスクワの西一二〇kmのボロジノの野で行われたロシア軍とナポレオン軍の有名なボロジノの戦いのパノラマが展示されている。
　このパノラマは一九〇九―一九一二年にロシアの戦争画家フランツ・ルボ（一八五六―一九二八）によって作られた。このパノラマは長い間展示されていなかったので、ボロジノの戦い一五〇周年にあたって、ロシアの画家たちによって根気よく、綿密に修復された。ルボのパノラマが円周一一五m、高さ14mの巨大なものであるということを指摘すれば、修復作業がどんなに大変だったかが分かるだろう。
　パノラマ館がここに建てられたのは偶然ではない。パノラマ館の近くに"クトゥーゾフの百姓小屋"と呼ばれる小さな家が立っている。現在は戦史博物館になっているこの建物で、ボロジノの戦いの6日後、ロシア軍総司令官ミハイル・クトゥーゾフ（一七四五―一八一三）は軍事会議を開き、モスクワを敵に渡し、そのあとナポレオンに消耗戦を強いることに決めた。事態はその通りになった。つけ加えておけば、ナポレオン軍の退却は、最後には壊走と壊滅に変わった。
　さらに先に進もう。一八一二年の祖国戦争のもう一つの記念碑である凱旋門はロシアの優れた建築家オシプ・ボベ（一七八四―一八三四）の設計によるもの。落成式は一八三四年9月、現在のベロルシア駅前広場がある場所で行われた。それから一〇〇年ちょっとたつと、市内の交通量が激増したので、凱旋門は取り壊されることになった。だが一九六八年、それは再びモスクワっ子の前に姿を現した。新しい場所、いま私たちが立っているクトゥーゾフ大通りに。
　クトゥーゾフ大通りは本来、凱旋門で終わりである。だが、もう少し先のポクロン丘まで行こう（ポクロンはロシア語でお辞儀の意味）。この名前は古いしきたりに由来する。昔、この方角からモスクワへやってきた人々は、寺院の金色の円屋根が見えると、市に向かって低くお辞儀をした。
　いまポクロン丘では工事がたけなわである。すでに勝利公園が造成され、間もなく記念施設――一九四一―四五年の大祖国戦争におけるソ連国民の勝利博物館が完成する。
　凱旋門と勝利博物館は意義深い歴史の符合と言えよう。



青年学生祭の記念切手

全ソ切手収集家協会員
イーゴリ・ザハロフ

第12回世界青年学生祭の記念切手5枚シリーズがソ連通信省から発行された。ポスター調の明るい図案はいずれもM・ルキヤノフ作。
　こんどの青年祭は約一五〇ヵ国の青年男女が参加し、国際青年運動史上最大のフォーラムとなるが、上段の1コペイカ切手では世界のさまざまな民族の青年代表が手を挙げて連帯を示している。
　中段右の3コペイカ切手の図案は、青年学生祭のシンボルマークを髪にかざすアフリカの女性。かつて植民地や従属国だった国での青年運動の発展ぶりを示している。
　下段右の5コペイカ切手は「青年のモットーは国際信頼」が主題。
　下段左の20コペイカ切手は、祭典のプログラムの多彩さを物語る。
　以上4点にはモスクワ祭典のマークが小さく入っているが、中段左の45コペイカ切手ではこのマークが中心を占める。また、ほかの切手では「第12回世界青年学生祭」の文字が図案を囲んでいるが、ここにはモスクワ祭典の標語「反帝連帯、平和と友好のために」の文字が入っている。5点ともオフセット印刷、目打ち12×12・5。

モスクワっ子のモノローグ

モスクワ雑題

アレクサンドル・フラトキン

こんどはあちこち動きまわらずに、居心地のよい喫茶店に腰を下ろして、ちょっとおしゃべりすることにしよう。ことによると、なにか思い出すかもしれないし、前に分からなかったことが分かるかもしれない。もっとも前もってお断りしておくが、この手のおしゃべりは、よくある伝で、ひとつの話題から他の話題へぴょんぴょん飛んで、結局モザイクのようなものになってしまうだろう。

◇

モスクワっ子とはどんな人種か？ それは、忙しがり屋で、要領がよくて、精力的で、愛想も付き合いもよく、客好きで、ユーモア感覚があって、着こなしがうまい。もっとも、必要以上に体重が増えだすのは、医者も、もちろん私たち自身も、本当に悲しいものだ。だが、若い者は別だ。モスクワの若者はすらりとして、上背があり、足が長くて、実に多芸多才だ。なにしろモスクワはインタナショナルな都市であり、一〇〇以上の民族が住んでいる国家の首都なのだから。

◇

モスクワっ子は、同じモスクワっ子のことをさかんに自慢するが、それももっともで、遠く外国にまで知れ渡った第一級の偉大な人物がきら星のごとく並んでいるからだ。あまり沢山いるから、ひとり、ふたりは数え落としても仕方がないほどだ。

例えばノーベル賞受賞者から始めることにしよう。ニコライ・セミョーノフ（88歳）、ソ連科学アカデミー会員、化学物理学の創始者のひとり。ニコライ・バソフ（62歳）、同会員、量子電子工学、レーザーの分野の最大の専門家。アレクサンドル・プロホロフ（68歳）、同会員、量子電子工学上の発見でバソフと共同受賞。レオニード・カントロビチ（62歳）、同会員、経済の最適計画化と管理の理論の開拓者のひとり。

ふたりの女性宇宙飛行士に触れないわけにはいかない。ワレンチナ・テレシコワ、宇宙飛行をした最初の女性、現在はソビエト婦人委員会の議長である。もうひとりはスベトラナ・サビツカヤ、2回も宇宙船で飛び、宇宙遊泳した世界ただひとりの女性、飛行機とスカイダイビングで世界記録を持っている。

モスクワ在住の偉大な芸術家のことをご存じの読者も多いと思う。たとえば、世界でも最も有名なピアニストのひとり、数十カ国の一流ホールで演奏したスビャトスラフ・リヒテル（70歳）、スカラ座をふくむ世界のオペラ劇場で聴衆を魅惑したボリショイ劇場の女性ソリスト、エレーナ・オブラスツォワ、おそらく現役のバレリーナのなかで最も有名なマイヤ・プリセツカヤなどだ。

◇

ここで無味乾燥な、といっても私の考えでは実に意味深長な数字に話を移したいと思う。では、たとえば、モスクワでは一日にどのくらいの物が製造されているか？

モスクワの工場のコンベヤーから出てくる時計は一日に四万個、テレビ二四二二台、ラジオ受信機一四三〇台、布地二〇二万九〇〇〇平方m、冷蔵庫六一〇台その他もろもろの工業製品。印刷工場から刷り上がってくる新聞が五八〇〇万部、雑誌が六百万部以上、単行本が約四百万冊。

市内の交通機関が一日に運ぶ乗客は一五四〇万人、そのうち地下鉄が六六〇万人。モスクワの居住者と外から来た者が毎日市内の商店、食堂、喫茶店に落とす金額が五七〇〇万ルーブル（1ルーブルは約三〇〇円）。毎日でき上がる新築住宅が一六二フラット。映画館の一ヵ月の観客数は三二万一〇〇〇人、劇場とコンサートホールの入場者が四万一〇〇〇人。

こんな数字もある。わずか一日で幸福な新婚カップルが二五五組誕生する。ママとパパが幼稚園と保育園へ連れていく幼児は四六万四〇〇〇人、毎朝小中学校へ登校する生徒が九〇万六〇〇〇人、そのうち三万四〇〇〇人が毎晩児童専門の音楽学校、芸術学校で学んでいる。

◇

これから一息いれるとか、なにか気晴らしをしたいと思ったとき、モスクワっ子はどこへ行くか？ もう一度数字を使うことにする。そういう必要に応えるためにあるのが常打ちの劇場30、クラブ二七七、映画館二一八、博物館・美術館67、スタジアム68、体育館一六一五、プール49、アイスホッケー競技場四一一、スキー基地一〇一、レストラン三八八、喫茶店、スナック、バーが二二八九、これにプラス公園、ディスコ、それからもちろん仲のよい友だちとなる。私たちはお客を呼んだり呼ばれたりするのが好きなのである。

だが、これだけたくさんあるうちのどこへ行ったらよいか、どれを選んだらよいか迷ってしまう、という方は私にお任せください。では、まず心の糧になるものから始めることにして、モスクワ音楽院の大ホールへお招きしましょう。きょうはスビャトスラフ・リヒテルがバッハ、ベートーベン、ショスタコービチを弾くかもしれない。あるいは、有名なボリショイ劇場へ行って、アラム・ハチャトリアンのバレエ『スパルタク』を見るという手もある。それからまたレーニン・コムソモール劇場、モスクワ芸術座、もしくはソブレメンニク劇場などという私の好きな劇場へ喜んでご案内しましょう。

それとも、トレチャコフ美術館かプーシキン美術館の展示室をご案内してもよい。トレチャコフには、聖像画（イコン）から始まるロシア絵画の名作、さては彫刻、版画があって、巨匠たちの気高い魂と驚くべき筆の冴えに接すれば感激のあまり胸が震えるはずだ。

プーシキン美術館に連れていったら、そこからあなたを連れ出すのは大骨だ。いや、これは冗談ではない！ この美術館には古代から今世紀に至る外国の名画が集めてあり、コレクションの規模ではレニングラードのエルミタージュ美術館に次いでわが国で2番目だ。ここには、レンブラントとルーベンス、クールベとコロー、それに印象派と後期印象派の、モネ、ルノワール、ゴッホ、セザンヌ、マチス、ピカソなどの世界でも最も秀れたコレクションがある。

読者の皆さんも私も現代の人間だから、当然スポーツが好きだ。そこで、ルジニキ地区にあるレーニン・スタジアムへ行くことにしよう。このスタジアムはモスクワだけでなくソ連全国でもナンバーワンである。この7月末に開かれる第12回世界青年学生祭の開会式はここの大競技場で行われる。このスタジアムは約一四〇のスポーツ施設からなる一大総合スポーツ場で、大競技場の収容人員数は一〇万五〇〇〇人、小競技場は一万二〇〇〇人、スポーツ宮殿は一万五〇〇〇人で、体育館30、サッカーコート10、テニスコート30、アイスホッケー、フィギュアスケート用リンク（冬季）20を備えている。

一九八〇年のモスクワ・オリンピック用として特別に建てられた屋内総合競技場にはぜひとも読者の皆さんをお連れしたい。場所はミール（平和）大通り。建築学と工学の観点からみて、すばらしい施設だ。アーチ状の円天井の下には支柱が一本もないから、冬は正規の広さのサッカー競技場になり、夏はバンディー競技場になる。バスケットボール、バレーボール、テニス、ボクシングは言うにおよばない。観客席の収容人数は四万五〇〇〇人。大規模なコンサートがよくここで行われる。世界青年学生祭のあいだはこの屋根の下に毎日青年祭の参加者と来賓が集まる。

それでは、お別れにもう少しモスクワ漫歩をすることにしよう。由緒ある閑静なアルバート街の横町や、モスクワ川の河岸通り、夜の遊歩道を通り、それからもう一度クレムリンに寄って、しばらく黙って赤の広場にたたずんでみよう。

モスクワの通りや広場が、さまざまな言葉で話すにぎやかな青年学生祭の参加者やお客さんたちで埋めつくされる日もそう遠くない。私たちはいつでもお客さんが大好きだ。その人たちにモスクワを見てもらい、この都会に住んでいる人間は真心のある、親切な人たちで、すべての人と平和と友好のうちに暮らしたいと心から願っていることを、自分の目で確かめてもらいたい。

第12回世界青年学生祭の開会式が行われるレーニン・スタジアム



公演迫るボリショイ劇場バレエ学校

バレエ一途の青春

本誌記者
エドゥアルド・アレシン
カメラ
A・マカロフ







上　ミンクス『パキータ』よりグラン・パ・ド・ドゥ（I・ジブロワとA・モナホフ）

下　ミンクス『パキータ』（V・リャキンとI・ペトロワ）



『ロシアのペレプリャス（踊り比べ）』（I・ベレジノイとD・ポパンドポロ）



バッハ『春の目覚め』（S・マルティロシャンとA・ラトマンスキー）



チャイコフスキー『白鳥の湖』からアダージョ（O・スボーロワとA・マルィヒン）

▶ミンクス『パキータ』（O・スボーロワ）



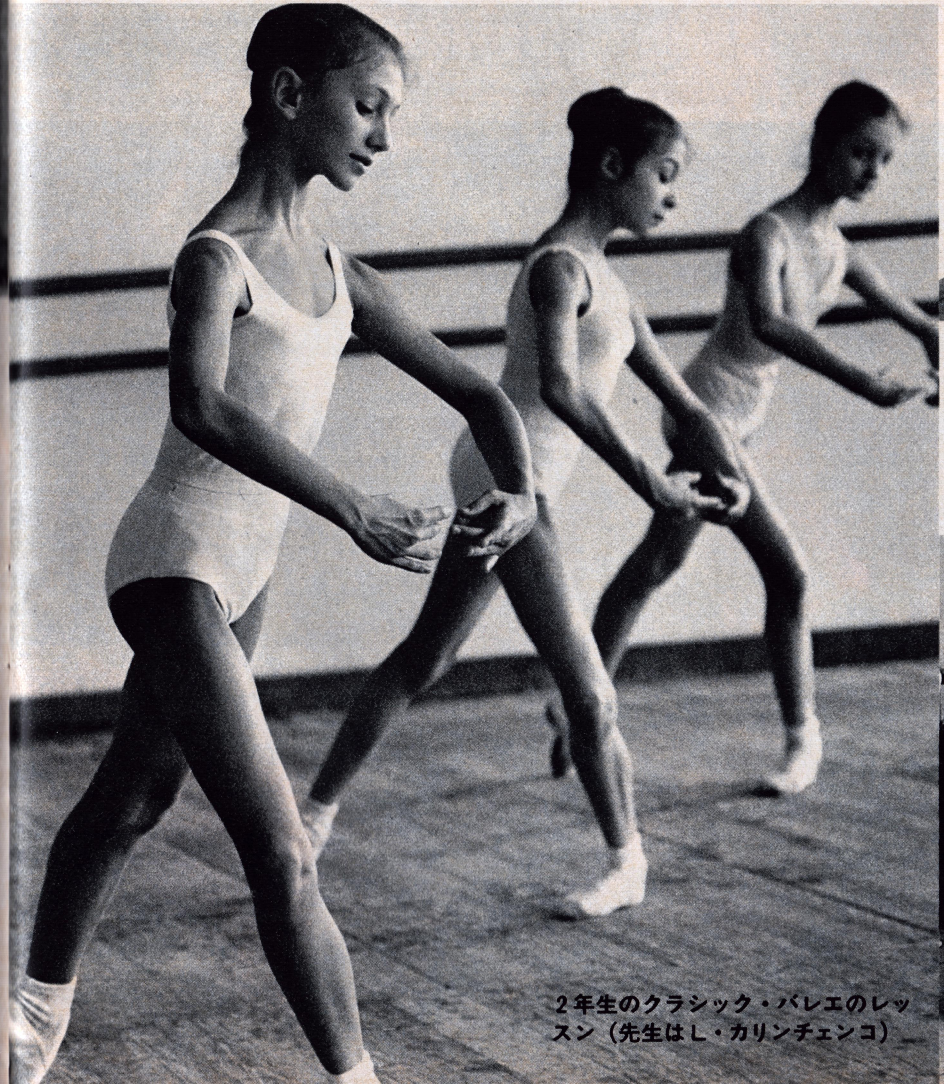
▶男子グループのクラシック・バレエのレッスンを担当するのは、アレクサンドル・プロコフィエフ先生。

7月16日から8月20日までボリショイ劇場バレエ学校（正式名称はモスクワ・アカデミー舞踊学校）が初めて日本で公演する。一行の上演プログラムには、チャイコフスキーの『白鳥の湖』第2幕、ヘルテルの『無益な用心』とドリーブの『コッペリヤ』からフラグメント、ミンクスの一幕物『パキータ』、その他バレエ・コンサート用演目が多数含まれている。

本号ではこのバレエ学校について紹介しよう。

（日本公演についてのお問い合わせは電話03・234・7207のエミー・インターナショナルまたは03・265・6361の東京労音へ）

モスクワ・アカデミー舞踊学校はソ連に20あるバレエ学校の中でもとびきりの名門校。歴史も古く、一九八三年には創立二〇〇年を祝った。ソビエト・バレエに世界的名声をもたらした名ダンサーを輩出しており、ボリショイ劇場のスターたち、マイヤ・プリセツカヤ、マリウス・リエパ、エカテリーナ・マクシモワ、ウラジーミル・ワシリエフ、ナタリア・ベスメルトノワも卒業生だ。現在の生徒数は六〇〇人。その中に社会主義諸国、フランス、イタリア、中

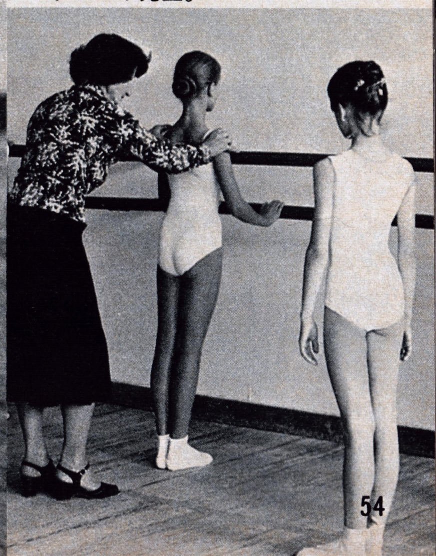


2年生のクラシック・バレエのレッスン（先生はL・カリンチェンコ）



クラシック・バレエの授業が終わり教室を移動する生徒たち。

▼最初のレッスン。1年生を指導するのはリュドミラ・ラフコワ先生。





E・ダシコワ先生のレッスン



イリーナ・クズネツォワ先生のレッスン



南米の60人の男女生徒がいる。授業料は無料で、衣装代、バレエシューズ代も無料。

この学校はよく"バレエの町"と呼ばれるほどの規模をもっている。建物の中には高い窓と鏡がはりめぐらされたスタジオが数十、コンサートホール、衣装部屋がある。教室、寮、図書館、食堂もある。

だが、この"バレエの町"に住み込むのはそれほど簡単ではない。毎年3月から6月までが生徒募集期間で、この間に入試委員会はざっと二〇〇〇人の応募者の中から90人を慎重に選ぶ。応募資格があるのは中等学校の3年を修了した10歳の少年少女。

「間違いは許されません。才能のある子だけにプロになるための本格的なバレエの訓練が許されるのです。そうでないとその子の子供時代を台なしにし、労力とお金が無駄になります」――こう語るのはソフィア・ゴロフキナ校長。27年間もボリショイ劇場の舞台に立っていた名バレリーナだ。

入試は3段階を経る。第1段階では肉体的条件――容姿上の欠陥の有無、均整、跳躍力、柔軟さなどで不適格者をふるい落とし、第2段階では各科の専門医（必要な診察室が完備した学校付属の小さい診療所がある）が健康状態を丹念に検査する。この学校での学習訓練には大きな肉体的負担がかかるから、丈夫な体が不可欠なのだ。第3段階では最終審査まで残った入学志望者の芸術的資質が問われる。受験生の踊りを見て校長や指導的教師からなる入試委員会が判定を下す。7―9人の"審査員"が5段階評価をし、90人が選ばれる。

厳しい試験に受かった少年少女たちには9月から"バレエの町"での新生活が待っている（モスクワっ子は家から通学するが、よそから来た生徒は寄宿舎に入る）。

この学校の生徒たちは同時に三つの学校――普通教育学校、バレエ学校、音楽学校で学んでいるようなものだ。8年間で普通中等学校の4年から10年までの教科をすべて履修せねばならないし、それ以外に毎日専門の実技――クラシック・バレエ、各民族固有の歴史・風俗舞踊、リズム体操、ピアノその他の授業がある。クラシック・バレエの授業には特に力が入れられていて、いつも時間割りの最初の方に入っている。クラシック・バレエは最もむずかしく、肉体的"鮮度"が要求されるからだ。来る日も来る日も、教師は動作の一つひとつ、回転の一回一回を、宝石を磨くように磨き上げる。

レッスン室での授業の後は"座学"の時間。数学、文学、フランス語その他を学ぶ。演劇史、バレエ史、美術もカリキュラムの中に入っている。そして昼食。昼食後は再び、専門科目と一般科目のくり返しである。

「バレエダンサーはただ単に踊る個体ではありません。まず最初に、幅広い関心と創造的思考を持ったパーソナリティ、人間です。本当に優れたダンサーは、ということですけれど。自分に対し絶えず

上 新学期が始まる9月1日、上級生が新入生にバレエシューズを贈るのが習わしになっている。その後、ソフィア・ゴロフキナ校長があいさつをする。



数学の時間



◀校内のコンサートホールで。



ドリーブ『コッペリヤ』の舞台



右 日本公演を目前にして校庭で記念撮影をする卒業試験の合格者たち。中央はソフィア・ゴロフキナ校長



3年生（イーダ・ワシリエワのクラス）の試験風景

要求し、毎時間、毎分授業に完全に自分のすべてを捧げることなしにはバレエダンサーは生まれません」――ソフィア・ゴロフキナ校長はきっぱりとこう言った。

ソフィア・ゴロフキナは素晴らしい教師だ。ゴロフキナ校長はどのレッスンも楽しいお祭りにしてしまい、生徒の感情を燃えあがらせ、共同の創造に引き入れてしまう。

この学校はそうそうたるメンバーを教師陣に抱えている。いずれもソ連の有名な劇場――モスクワのボリショイ劇場やレニングラード、ペルミ、ゴーリキー、その他のオペラ・バレエ劇場の舞台で20年以上踊って来た名ダンサーばかり。その中にはアレクサンドル・プロコフィエフ、ピョートル・ピョーストロフ、ナタリア・ズロトワ、リュドミラ・ニコノワなどがいる。

在学中、生徒たちは何度も舞台出演する。初学年からステージ実習がある。『シンデレラ』や『ドン・キホーテ』、『眠りの森の美女』などの子役のパートを勉強する。これらのバレエがボリショイ劇場やスタニスラフスキー・ネミロビチ＝ダンチェンコ記念音楽劇場の舞台で上演される時、出演している子どもはみんなこの学校の生徒だ。それ以外に、1カ月に一―二度はクレムリンの大会宮殿の舞台で出演者全員が豆ダンサー（生徒）という出し物が上演される。これはドリーブの『コッペリヤ』であり、ヘルテルの『無益な用心』である。豆ダンサーの舞台はいつも満員で大成功を収めている。同校にはモスクワの他の舞台に比べてそん色ない設備の〝自前の〟劇場があるが、この舞台でも定期的にバレエやバレエ・コンサートが上演される。

この学校の生徒たちは諸外国――米国、フランス、スペイン、英国その他で公演し、成功を収めた。同校の生徒たちは国際コンクールにも何度も参加している。一九八〇年のバルナ国際バレエ・コンクールではニーナ・アナニアシビリ（現在はボリショイ劇場で活躍）が金賞を射止めた。一九八一年のモスクワ国際バレエ・コンクールではナタリア・アルヒポワ、アンドリス・リエパ、とバルナにつづいてニーナ・アナニアシビリが再度金賞を獲得した。

どこのバレエ劇場もバレエ集団もいいダンサーを欲しいので、この学校のバレエ公演や同校の生徒が参加しているコンクールには必ず大勢のバレエマスター（振付家）や幹部が顔を揃える。ここの卒業生は引く手あまたで、普通は生徒の方が選り好みをする。毎年、伝統的に、数人の最優秀者はボリショイ劇場のバレエ団に迎えられる。そのほか、ここの卒業生の就職先は、モスクワやその他の都市の音楽劇場、イーゴリ・モイセーエフ主宰の民族舞踊アンサンブル、〝ベリョースカ（白樺）〟舞踊アンサンブルなどだ。クラシック・バレエの道に進むにしろ、民族舞踊、モダンバレエに進むにしろ、ここの卒業生は、ここで身につけた高度のバレエ文化、磨き上げられた技術、舞踊芸術に対するクリエーティブな態度を一生涯もちつづけるだろう。





ドリーブの『コッペリヤ』第3幕。人形のバリエーションを踊る生徒のS・フェシチェンコ。



試験のあと、ボリショイ劇場バレエ団に入団が決まった卒業生にはなむけの言葉を贈るゴロフキナ校長。

文化トピックス



アンサンブル"モスクビチキ"

この3月、女性だけのボーカル＝器楽アンサンブル"モスクビチキ"が結成10周年を祝った。メンバーは全員モスクワの音楽学校（複数）の卒業生。ソ連および外国の作曲家の曲を得意とする。内外のミュージック・フェスティバルに数多く出演。現在、第12回世界青年学生祭向けのコンサートを準備中だが、チャーミングな女性ばかりのこのアンサンブル、青年学生祭のアイドルになるだろう。



『ワーニャ伯父さん』の一場面。エレーナ・アンドレーエブナ（アナスタシア・ベルチンスカヤ演）とアストロフ（オレグ・ボリソフ演）

『ワーニャ伯父さん』を新演出で

チェーホフの戯曲『ワーニャ伯父さん』がモスクワ芸術座で初演されたのは一八九九年のこと。チェーホフの劇作家としての地位を不動のものにしたこの戯曲は一八九七年に発表されて以来、作家の生存中も、死（一九〇四年）後も、ソビエト時代に入ってからも、いろいろな劇場で上演されてきた。チェーホフと縁の深いモスクワ芸術座では一九四七年から五八年まで上演したあと、この作品を取り上げなかったが、昨年、首席演出家のオレグ・エフレーモフが新演出で再演した。

配役も一新され、現代的手法がふんだんに取り入れられているが、エフレーモフ演出は全体として芸術座の古典的伝統に忠実で、チェーホフ劇の真髄を伝える重厚な舞台になっていると好評だ。

世界を描く子どもたち





子どもはみんな豊かな才能を秘めている。それを外に出す手伝いをしてやらねばならない――最近35周年を迎えたキエフ（ウクライナの首都）レーニン区ピオネール宮殿の児童画アトリエの先生たちはこう言う。同アトリエの生徒数は現在200人以上。多くの生徒の絵が全ソ絵画コンクールや国際コンクールで一度ならず入賞し、この子どもたちの作品は世界120カ国で展示された。アトリエ創立者の美術家ナウム・オスタシンスキー（ソ連教育学アカデミー芸術教育学術評議会員）が創立以来ずっと指導を続けている。子どもの絵（写真上）と生徒に囲まれるオスタシンスキー（下）。

バイオリン作りの名人



この人、バイオリン作りの職人ユーリー・ボチェキン（写真）が製作したバイオリン、ビオラは60丁以上もあり、多くの優れた演奏家に愛用されている。

小さい時から楽器づくりに夢中だったユーリーは、モスクワのグネシン記念音楽教育大学を卒業すると、楽器製作研究の道に入った。古書をひもといて昔の名工たちのニスの使い方やら木の扱い方の秘密を探った。名工になるために必要な楽器づくりのこつを会得した後、1974年、モスクワの全ソ・バイオリン職人コンクールにチャレンジして見事1、2位を独占した。腕が認められてイタリアに派遣され、バイオリン製作のメッカ、クレモナのアントニオ・ストラディバリ記念バイオリン職人学校で研さんを重ねた。先頃ストラディバリ国際コンクールでユーリー製作のビオラは名誉賞に輝いた。

ソ連共産党第27回大会に向けて

経済と科学技術進歩

本誌経済評論員　ゲンナジー・ピサレフスキー

ソ連が科学技術のほとんどすべての重要分野で大きな成果をあげていることは、争う余地のないほど明白である。世界の科学技術関係の研究成果の$\frac{1}{3}$は、ソ連の学者の研究によるものであり、現にソ連の発明の登録件数は以前からずっと世界のトップを占めてきた。

しかし成果は成果として、いまわれわれが重視しているのは、国の科学技術力をもっと有効に生かす問題である。これらの問題の解決は必ずしもうまくいっておらず、経済の大半の部門の科学技術進歩ははかばかしくない。ソ連の学者の発見を、西側の会社がソ連の企業の先を越してライセンス取引でいち早く入手し、導入して、成果をあげている場合が間々ある。残念なことである。

要するに、いまの新技術の発展テンポではだめなのである。ところがソビエト社会には、国の社会・経済的進歩を大きく促進するのに必要なものは何でもあるのだ。

ミハイル・ゴルバチョフはソ連共産党中央委員会総会（一九八五年4月23日）でこう強調した。

「最大の課題は、先進技術を導入し、労働生産性を何倍も高め、単位生産物当たりの原材料使用量を減らし、投資効率を上げることのできる新世代の機械・設備の生産に速やかに移行することである。工作機械工業の改善、科学技術進歩の触媒としての計算機器、計装工業、電機工業、エレクトロニクスの発展の促進を、第一に重視しなければならない」

このようにいま問題になっているのは、機械工業のすべての部門を優先的に発展させることである。そのために来年のソ連共産党第27回大会で審議される第12次5カ年計画（一九八六－一九九〇年）では、機械工業に優先的に資材、資金を配分するとともに、設備の更新を促進し、老朽設備を大々的に取り替えることにしている。

それはまず経済、労働、日常生活のコンピューター化とかかわりがある。このほど採択された二〇〇〇年までの全国的なコンピューター生産計画では、国民経済、保健、教育、科学研究などでのコンピューターの使用水準を世界の水準並みに引き上げることになっている。特に、普通教育学校では9月1日から始まる新学年から「情報科学とコンピューターの原理」のコースが採用される。

ソ連の科学は、生産の自動化、公害のない安全な製造技術の開発や保健の改善などの社会問題の解決をめざして発展している。これに関連してとくに大事なのは、工場での単純手作業の比率を下げることであり、この比率はいまの尺度から見て不当に大きい。現在労働力はほとんど伸びておらず、ゼロ成長に近い。これは二〇〇〇万のソビエト人の生命を奪い、出生率をピンチに追いこんだ第2次世界大戦の結果である。大戦の結果出生率が極端に低い年があった。その上、いま青年男女は通常、普通義務教育である中等教育を修了して社会生活に入る。彼らには手仕事は当然ながら魅力はない。だからソ連は総合的な機械化やロボット使用を重視しているのだ。次の第12次5カ年計画では企業やサービス部門で数万台のロボットが作動し始める。

計算によれば現在の基盤のままでも、科学技術革命の促進によって国民所得の伸び率（ここ数年4％を超えない）を年間5－7％に引き上げることができる。このような発展テンポこそわれわれに必要なのだ。われわれがこのような発展テンポを目指しているのは、広範な社会計画を成功裏に遂行するためである。しかしそのためには労働生産性を大幅に向上させ、将来就業者1人当たりの生産高を世界最高に引き上げる必要がある。

ソ連の経済成長率は、実際に数カ月間で引き上げることができる。しかしそれは、米国での"レーガノミックス"の場合のように、経済発展の社会的ストッパーが弱められるか、または段階的に除去されるならばの話である。だがそのためには労働の集約度を高め、医療、教育、住宅建設費などを減らさねばならなくなる。

しかしこんなやり方は人道的なソビエト社会の目的に反する。この社会では社会的目的の優先権が法的効力を持っている。社会主義下では物的生産の発展は、社会問題の解決手段となっているのだ。

読者の質問に答える

本号では編集部に寄せられた3人の方のご質問にお答えします。なお、質問の文章は、原文そのままではなく、編集部で少し整理させていただきました。

次の二つの質問は、稚内市の畑佐暁子さん（14歳）から寄せられたものです。畑佐さんは昨年11月26日にNHKテレビで放送された「モスクワ団地族」の感想を述べた手紙の中で次のように質問しています。なお畑佐さんはソ連へ一度旅行したことがあるそうです。

質問1　日本人に見られるソ連についての今までの誤解は、ソ連にも問題があるのではないでしょうか？　たとえばソ連では、写真に撮りたいものを全部撮らしてくれません。また、ソ連の人が写真を撮られるのをいやがるのも、私には不思議です。どうしてカメラをきらうのでしょうか？

質問2　「モスクワ団地族」で見たのですが、住宅に入居するために、なぜあんなに長いこと順番を待たなければならないのですか？　日本ではお金があれば、たいていの所には住めます。

お答え　まず写真撮影のことですが、ソ連では空港や旅客機内、一部の美術館内での写真撮影は禁止されています。また人にカメラを向けて断わられたのは、恐らくあなたの運が悪かったのでしょう。ふつうはソ連の人を写真に撮るのに、別段問題はありません。しかし、写真に撮られるかどうかは各人のプライベートなことなので、わが国にある（もちろん日本にもあるでしょうが）一定のエチケットは守っていただかなければなりません。誰かを写真に撮る前には、その人にひとこと写してよいか、たずねるべきです。それとカメラを持った外国人にある程度神経をとがらす人がいてもおかしくありません。というのも、いままで外国の新聞雑誌にソビエト人やわが国の現実をひどく歪めたり、極端に片寄ったとらえ方をしたさまざまな写真が掲載された前例が少なからずあり、そのことはわが国の人々も知っているからです。

次に住宅の問題ですが、ソ連では住宅建設は商取引の対象ではなく、大多数の住宅（全体の約85％）は国費で建てられます。これらの住宅は売買されず、住民に無期限に賃貸され、居住者はその借家権を相続人に譲渡できます。しかも家賃と公共サービス料金（水道、光熱費など）はふつうはその家庭の所得の3－5％以内です。ソ連では大々的に住宅建設が行われていますが、それでも国はまだ、居住条件を改善したい人すべての希望をかなえるところまではいっていません（住む家のない人やボロ家に住む人はかなり前に一掃された）。そのためある程度の期間、入居の順番を待たなくてはなりません。

良いフラットをより早く入手したい人は、住宅建設協同組合に加入することができます。住宅建設協同組合の会員はそのアパートの建設経費だけを払います。地代と電気・暖房・水道・ガスの敷設費は払う必要はありません。協同組合員は住宅価格の70％から80％を国の低利の貸し付け金でカバーすることができます。これは年利0.5％で、25年間の分割払いのローンです。

農村部の住民は個人住宅の建設用に、都市部の住民はもよりの農村の園芸協同組合の菜園に小さい家（セカンド・ハウス）を建てるために貸し付け金を受けることができます。

質問　ソ連は日本人の移民を受け入れていますか？　移民には仕事がありますか？（東京・佐藤富貞さん）

お答え　「ソ連における外国市民の法的地位に関する法律」によれば外国市民は、内務機関が発行した居住許可証と居住証があれば、ソ連国内に定住することができます。

ソ連居住の外国市民は、ソ連市民のために定められた法令と手続きにより企業、機関、団体で労働者や職員として働くことができます。またソ連と連邦構成共和国は、勤労者の利益の擁護や平和の事業のため、革命運動、民族解放運動に参加したため、また進歩的な社会・政治活動、学術その他の創作活動のために、祖国で迫害されている外国市民に避難場所を提供することができます。

日本からの労働者移民の件ですが、日本からも他の国からも労働者移民はソ連には来ていません。ソ連で働いている日本人および他の外国市民は、もっぱらソ連の諸組織との契約に基づいて働いている人たちです。

質問　私は一九八一年に北海道・富良野で行われたスキー・ワールドカップ大回転で優勝したアレクサンドル・ジロフ選手のファンでした。事故で亡くなったそうですが、いつ、どこで、どんな事故で亡くなったのですか？（北海道・田中真奈美さん）

お答え　一九八一年、スポーツ関係者はアレクサンドル・ジロフをアルペンスキーの新しい花形として注目し始めました。それより先、彼はスキー・ワールドカップのブルガリア大会で優勝し、大回転とスーパー大回転ではあの有名なスウェーデンのステンマルク選手とアメリカのフィル・メーア選手をしのいで、総合成績3位に進出したからです。

つづいてスイスのラークスで行われたワールドカップでも、大回転で優秀な記録を出して1位になりました。田中さんのお手紙にあるようにワールドカップ富良野大会でも大回転で優勝しました。しかし、残念なことに、ジロフ選手は才能の完全な開花を前に一九八三年の初め、モスクワ近郊で自動車事故のため亡くなりました。24歳でした。

ことしの1月、モスクワ郊外でアレクサンドル・ジロフを偲ぶ回転のスキー大会が開かれ、彼の弟のアンドレイが参加しました。このジロフ記念競技会は今後も続けられるでしょう。

イルクーツクで ソ日青年セミナー

——北海道青年交流団の訪ソ

イルクーツク駐在本誌記者 ウラジーミル・ウラソフ
カメラ P・マリノフスキー



▲青年セミナーの会場で



◀〝兼六園〟クラブのあるイルクーツクの友好会館の前で。中央で国旗を持つのは小林恒人・日本交流団団長（左）とセルゲイ・カルギン・兼六園クラブ会長。

東シベリアのイルクーツク市で、去る5月上旬、ソ日青年セミナーが開かれた。セミナーにはイルクーツク州の青年の代表たちと小林恒人・社会党衆議院議員を団長とする北海道青年交流団が参加した。

セミナー参加のためソ連青年団体委員会に招かれたのは、日本社会党北海道本部青少年局、社会主義青年同盟（社青同）北海道地区本部、全北海道労働組合協議会（全道労協）青年婦人協議会、北海道農民連盟（道農盟）青年部の活動家や指導者たち。一行は5月5日から9日までイルクーツクに滞在し、シベリアの青年代表たちと、平和の強化、隣り合ったソ日両国民間の友好交流の深化をめざす共同闘争の諸問題について話し合い、同時にソビエト国民の大祖国戦争勝利40周年記念の祝賀式典に参加した。

日本の交流団一行はイルクーツク到着のその日、レーニン記念碑と第2次世界大戦戦没者慰霊碑に献花した（イルクーツクからは約二〇万の市民が戦線に赴き、その半数近く——七万九〇〇〇人が戦死した）。

「戦線から数千kmも離れていたここでもそうなのですから、あの戦争中ソビエトの国がどれほど取り返しのつかない損害を受けたかということを、ひしひしと感じます」と語ったのは、団員の一人、石井義重さん（札幌市）。「私は、第2次世界大戦のあらゆる重荷に耐えたソビエト国民の勇気とヒロイズムに感動しています。ソビエト国民が平和とすべての諸国民との友好を求めていることが理解できました」



◀日本の青年交流団は第2次大戦で戦死したシベリア人の記念碑に献花した。

2日間にわたるソ日青年セミナーはイルクーツク友好会館で行われた。セミナー開催にあたり、ボリス・ネダシコフスキー・ソ連共産党イルクーツク州委国際部長、パーベル・ウハノフ・コムソモール州委第一書記、小林恒人団長が報告に立ち、国際情勢を分析し、青年の平和擁護運動についての評価を述べた。セミナーでは日本の参加者の大多数が現代と青年運動の緊要問題について自分の意見を述べ、示威運動、平和行進、平和基金や平和アピールの署名集めにおけるソビエト青年の積極的な経験を指摘した。一方、小檜山秀昭・社青同北海道地区本部長は、モスクワ世界青年学生祭への参加準備のため、日本でどんな作業が行われているかについて述べた。

セミナー終了後、日本の交流団員とイルクーツクの各種企業や団体の青年たちの会合が数多くもたれた。会合では討論や質疑応答のほか、ダンスなども催され、参加者はお互いにさらに身近に知り合うことができた。また日本の交流団は〝兼六園〟クラブを訪問した。これはソ日協会イルクーツク支部の青年のクラブで、活発なクラブ員はもう6年間、野球や碁を楽しみ、日本語や日本文学、日本史、日本の芸術を学んでいる。現在イルクーツク州には日本の姉妹都市とつねに交流をもっている都市やまちが四つあり（イルクーツク、ブラーツク、ジェレズノゴルスク、シェレホフ）、州内のソ日協会会員の数は一〇万人に達している。

一行はイルクーツクの計装工場〝エタロン〟を訪れて青年労働者の労働条件と休息条件を視察した。山内徹・太平洋労組連合会事務局長の話——

「広大なシベリアの開発で奇跡を成し遂げた勇敢で英雄的精神に燃えたソビエト青年の話をずい分聞きました。うれしかったのは、多くの若い人たちと知り合い、彼らが平和と日本国民との友好を強化したいと固く決意し、その熱意にあふれているのが分かったことです。これはとても重要なことです。なぜならわれわれ両国の将来は、生活のすべての分野における緊密な協力なしには考えられないからです」

また帰国を前に小林恒人・衆議院議員・交流団団長は次のように語った。

「セミナーを機に、平和擁護の問題や両国間の友好関係の発展の問題で意見を交換し合い、協力のための新たな足場をつかんだことは極めて重要だったと思います。こうした青年同士の出会い、またあらゆるレベルの意見交換は、いっそうの相互理解とアジアおよび全世界の強固な平和確立への道を切り開く助けとなるでしょう」



イルクーツクの木造建築物博物館でウスチイリムスクのアマチュア民族舞踊団と。

ハバロフスク＝新潟 姉妹都市提携20周年

極東駐在本誌記者
アナトリー・イリユホフ

去る4月末、ハバロフスク市民は新潟市との姉妹都市関係樹立20周年を祝った。これを記念してソ日協会ハバロフスク支部員たちの集会が開かれ、市の当局者も出席した。また、ハバロフスクと新潟の関係を回顧する写真展が開かれ、大映画劇場〝ギガント〟では日本の日本海沿岸とソ連極東の諸都市間の交流の誕生と発展を物語る記録映画が上映された。「友好のために」というスローガンのもとにサッカー、バレーボール、バスケットボール、卓球の試合が行われた。

20周年を祝うため4月19日には鶴巻正・新潟市収入役を団長とする新潟市代表団と日本舞踊・民謡のアマチュア芸能団の一行がハバロフスクを訪れた。日本からの来賓は記念行事に出席し、幼稚園、学校を訪れ、温室栽培農場や心臓病サナトリウム、一連の工業企業を見学し、博物館、歴史記念物、ハバロフスクのその他の名所旧跡を訪れた。



ハバロフスク市の幼稚園を訪れた新潟市の代表団

新潟市代表団一行はアレクサンドル・パンチェンコ・ハバロフスク市人民代議員ソビエト執行委員会議長（市長）とじっくり話し合った。この席でパンチェンコ市長は、両市の姉妹都市関係の発展を高く評価し、ハバロフスク市の発展の見通しについて説明し、次のように語った。

「両市の姉妹都市関係の細い小道は、この20年間に友好と相互理解の広い道路に成長した。ハバロフスクと新潟は毎年、医学、教育、文化、サービスと都市経営部門の専門家代表団を交換し合っている。こうした交流の際、両市は最良のものをすべて見せ合い、経験を分かち合い、都市経営の問題や保健、国民教育、青少年育成の諸問題を話し合っている。

また、アエロフロートと日本航空の飛行機が飛んでいるハバロフスク＝新潟間の定期航空路も、開設されて12年になる。この線の利用客にはビジネスマン、学者、芸能人、観光客、スポーツマンなどが多く、各種貨物の輸送量も増えている。

毎年夏休みには、新潟の小中学生がハバロフスクへやって来る。彼らはソ連の同年代の学童たちと共に、美しい郊外の森にあるピオネール・キャンプで遊び、スポーツをし、ハイキングに出かけたりして楽しい数日を過ごす。

文化交流も発展、強化している。ハバロフスクの工場のアマチュア芸能集団が日本へ公演に行ったし、ハバロフスクへは新潟のバレエ学校の生徒たちが3度公演に来た。いま来ている日本舞踊・民謡のアマチュア芸能団の公演も好評だった。相手の都市の青少年の絵画展も相互によく行われる。日本の生け花の先生方による作品も当地で披露されたし、両市のスポーツ競技会も何度か行われてきた」

双方は友好的な会談での意見交換を通じて、新しい住宅地の建設や建築様式、緑化、工場排出物からの大気の保護、交通騒音対策、交通安全など、切実な問題について経験や情報を相互に交換することが必要であり望ましいとの結論に達した。

双方は、多方面の実務・文化交流をさらに発展させる可能性がまだたくさんあることを指摘した。こうした交流がもっと盛んになれば、ハバロフスク・新潟市の姉妹都市関係が強化されるばかりでなく、ソ日両国民間の相互理解を深める上でも役立つだろう。

日本の女性を飾るロシアンファー

——東京のソ連産毛皮展に来日した毛皮輸出入公団の部長に聞く



会場に展示されたソ連産毛皮製品の数々

5月27日から30日まで東京・新宿のホテル〝センチュリー・ハイアット〟で、東京の商社エウレコとソ連の全ソ毛皮輸出入公団（ソユズプシニーナ）との共催で毛皮の展示会「一九八五・ロシアンファーの魅力」が開かれた。全ソ毛皮輸出入公団のアキム・イブキン部長に、本誌記者V・デウーリンがインタビューした。

——ソ連の毛皮産業の発展について簡単に。

わが国の毛皮貿易は長い歴史をもっている。ロシアの毛皮は昔から外国の数多い買い手の注目を集めてきた。ロシアンセーブル、レッドフォックス、アーミン、コリンスキー、リス、マーテンその他ロシアでしか買えない多くの毛皮を求めて、絶えず商人たちがロシアへ買い付けにやってきた。

ソ連は伝統的に毛皮の国際市場への最大の供給国だが、それは特殊な自然・気候条件に恵まれていること、豊かな自然を合理的に利用していること、毛皮獣飼育を発展させていることなどによる。

近年わが国は、国民経済の重要な一部門である毛皮獣飼育の発展できわめて大きな成果を収め、ミンク、ロシアンセーブル、ブルーフォックス、その他の色合いのフォックスなどの毛皮の生産量をかなり増やした。現在ソ連は毛皮の生産量で世界第1位を占める。製品の大部分は国内で消費され、輸出されるのは15％にすぎない。



全ソ毛皮輸出入公団のイブキン部長

——全ソ毛皮輸出入公団はいつ設立されたのか？ その主な仕事は？

毛皮輸出入公団は一九三一年、毛皮輸出を行うソ連貿易省管下の公団として設立された。三〇年代の初め、公団は約20カ国六〇〇社と取引関係を持った。ここ50年間に公団の取引先は著しく増大し、現在ではすべての大陸の60カ国二〇〇〇社以上と取引をしている。公団はまた毛皮の完成品、原皮、皮革その他の動物製品の輸入を行っている。しかし公団の主な仕事はやはり毛皮の輸出だ。

——あなたの公団が直接主催しているレニングラード国際毛皮オークションについて。

レニングラード国際毛皮オークションは、ロシアの毛皮見本市のすばらしい伝統を引きついでもう50年以上も行われており、そのバラエティーに富んだ製品、品質の高さ、優れたサービスで、世界の多くの国のバイヤーたちから高い評価を得ている。

第1回レニングラード毛皮オークションが開かれたのは一九三一年3月だった。その時は欧米12カ国から56人のバイヤーが参加した。出品されたのは狩猟業者が捕獲した野生毛皮が主で、そのほかに少量のカラクル（アストラカン）があった。

その後、毛皮獣養殖技術、カラクル羊の飼育技術の発達に伴い、レニングラード国際オークションが外国市場向けに出品する毛皮の種類は著しい変ぼうを見せた。

ミンク、シルバーフォックス、レッドフォックス、ブルーフォックス、セーブル、フィッチ、ラクーン、その他の養殖毛皮はソビエト産毛皮の大部分を占め、今や全ソ連産毛皮の80％を構成するようになった。

全ソ毛皮輸出入公団創立後54年の間に第2次世界大戦以前は17回、大戦以後に82回のオークションが開かれた。その初期（一九三九年まで）にはオークションはホテル〝アストリア〟かロシア美術館で開催され、ドイツ人のオークショナーがドイツ語で行った。

一九三九年、レニングラードのモスクワ大通りに、三〇〇―三五〇人のバイヤーを収容できる毛皮オークション専門の建物が建設された。現在もこの建物が使われている。

戦後初めての、第18回国際オークションは一九四七年7月に開催された。競売はソ連のオークショナーによりロシア語で行われたが、その後経験を重ね、バイヤーの便利さも考えて、オークションは英語で行われるようになった。オークションの進行はとても早く、前回のオークションでは第一日目に9時間で一〇〇万枚のミンクの毛皮がすべて売れてしまったほどだ。

今年1月の第99回オークションには25カ国から二七六人のバイヤーが参加し、その中には26人の日本人もいた。10種類以上の動物の毛皮約二七〇万枚が競りにかけられたが、バイヤーたちの積極性が目立った。

レニングラードのオークションではソ連産毛皮だけでなく、アフガニスタン、ドイツ民主共和国、朝鮮民主主義人民共和国、ポーランド、オーストラリア、モンゴル、英国など他国産の毛皮もコミッションベースで売りに出される。

――全ソ毛皮輸出入公団と日本商社との関係は?

日本は毛皮貿易の分野でのソ連の昔からのパートナーだ。わが公団は日本の主要な毛皮商社と長年実務的関係を維持・発展させて来た。

ソ連産ミンク、ロシアンセーブル（ソボル）、ブハラ産カラクル（ブハラ）、ブルーフォックス、シルバーフォックス、レッドフォックスは日本で評判がいい。レニングラード国際オークションで日本の商社が買い付けたロシアンファーの品質の良さとバラエティーに、日本の女性のお客さんは満足されよう。そう期待する。

日本の毛皮商社がレニングラード毛皮オークションに定期的に参加するようになったのは一九六〇年代からで、現在最も積極的に買い付けているのは、小林桂株式会社、西陣洋傘株式会社、木下商事株式会社、岐阜毛被株式会社である。

全体的に日本の商社の毛皮の買い付けは最近著しく増大した。例えば一九八四年には総額六五〇万ドルだったのに、今年1月のオークションだけですでに五六〇万ドルの毛皮を買い付けている。

日本のパートナーの成功と繁栄を願い、この7月レニングラードで開催される第一〇〇回オークションでの再会を心待ちにしている。

ファンが選んだ昨年のソ連映画ベストテン



▲『残酷なロマンス』のニキータ・ミハルコフ。左はラリサ・グゼーエワ。

ソ連のポピュラーな映画雑誌「ソビエト・スクリーン」（月2回発行、年間発行部数は約五〇〇〇万部）は今年も例年どおり第10号に、"読者が選ぶ昨年度の最優秀作品と主演男女優賞"の結果を発表した。この読者コンクールはファンの熱い人気に支えられ、今年で27回目。

今回は、三万五二八〇通（女性55%、男性45%）の投票が寄せられた話題を呼んだ『残酷なロマンス』（日本での題名は『持参金のない娘』）が最優秀作品になり、監督として日本でも名が知られ、ファンも多いニキータ・ミハルコフが主演男優賞（得票率26%）、やはり4月に上映された『生命も、涙も、愛も』（日本での題名は『追憶のマリア』）で好演（老人ホームの料理係の役）のナタリア・グンダレワが『女子寮はひとり者のために』の演技で主演女優賞（得票率15・8%）に選ばれるなど、日本のソ連映画ファンにも興味深い結果になっている。



『かかし』撮影中のシーン。左からロラン・ブイコフ監督、主演のクリスチナ・オルバカイテ、ユーリー・ニクーリン。

以下その結果を簡単に紹介する。

1位を争ったのは公開以来多くの観客を動員し、新聞・雑誌をはじめ職場や家庭などいたるところで賛否両論の議論が沸き上がった話題の2作品『残酷なロマンス』と『かかし』だった。

前者はA・オストロフスキーの戯曲『持参金のない娘』の映画化で、映画と原作はそれぞれ独立した作品、とする意見と映画化は原作に忠実であるべきだという意見が対立し、昔からの永遠の論争を復活させた。後者は子どものいじめを扱った問題作。13歳の少女の役を13歳の少女クリスチナ・オルバカイテ（歌手アーラ・プガチョワの娘）が見事に演じ、その点でも評判になった。

子どもには理解できないだろうし、現実にはあり得ないという『かかし』に対する批判に反し、わたしも主人公と同じ体験をしたとか、クラス全員で見に行き感動したという同じ年頃の子の手紙（投票）が多く寄せられた。また男性の投票が目立ったのも興味深い。

演技ベストワンに選ばれたN・ミハルコフ、N・グンダレワの談話を紹介しよう。

最優秀主演男優に選ばれたニキータ・ミハルコフは喜びを次のように語った。「批評家にさんざんたたかれたからファンもある種の用心深さでこの映画を見たと思う。だからこういう結果が出るなんて思いもしなかった。監督、パートナー、スタッフ一同の仕事が認められて実にうれしい。カランディシェフ役（ヒロインのラリーサに求婚するが、ラリーサはパラートフに夢中。ついには彼女を射殺してしまう）をA・ミャーフコフに、パラートフ役を私に、と決めていたリャザノフ監督に請われてOKし、結局ロケ地のコストロマで全力投球。監督と一緒に独自のパラートフ像を作り上げた。パラートフは血の一滴一滴、肉の一片一片までその土地の産物だ。彼の持つすべてのいいもの、悪いもの、残酷さ、やさしさ全部が大地から生まれたものだ。どれもが過剰に過ぎ、ないのは節度の感覚だけという男。ファンの方々はパラートフ型の人間に共感を寄せられたのではなく、この形象に注ぎ込まれたわれわれのエネルギーを評価してくれたものと思う。くり返しになるが、これは私一人の働きではない」

最優秀女優のナタリア・グンダレワは芸歴30年のベテラン（マヤコフスキー劇団所属）で、ロシア共和国功労俳優。数々の賞に輝く。「ソビエト・スクリーン」誌のベスト・ワンに選ばれたのも今回で3度目。

「最多記録ですって！ うれしいけどこれからが大変。観客の要求に応える演技をしていかなくてはなりませんもの。どの役をやってもファンの期待を裏切らないように。責任重大ね」

いつもながらのさわやかな口ぶりでグンダレワはこう語った。

ファンが選んだ昨年度のベストテン

1. 残酷なロマンス（E・リャザノフ監督、モスフィルム）
2. かかし（R・ブイコフ監督、モスフィルム）
3. かえり見よ（A・マナサロワ監督、モスフィルム）
4. リュボーフィ・オルロワ（G・アレクサンドロフ、E・ミハイロワ監督、モスフィルム）
5. ベールイエ・ロースィ村（I・ドブロリューボフ監督、ベラルシフィルム）
6. いつまでも君を忘れないよ（P・カドチニコフ監督、レンフィルム）
7. 戦時のロマンス（P・トドロフスキー監督、オデッサ映画スタジオ）
8. 岸（A・アロフ、V・ナウモフ監督、モスフィルム。西ドイツ・アリヤンス・フィルムプロダクション協力）
9. 女子寮はひとり者のために（S・サムソン監督、モスフィルム）
10. 愛と鳩（V・メニショフ監督、モスフィルム）

タシケントの新地下鉄

中央アジア、ウズベク共和国の首都タシケント（人口約200万）で第2の地下鉄線が開通した。延長5.6kmのこの線には5つの駅がある。そのひとつは15世紀のウズベクの偉大な詩人・政治家の名を冠した“ナボイ”駅（写真）で、市の中心部と鉄道駅とを結んでいる。最初の12kmの地下鉄線は8年前に開通した。

タシケントは地震多発地帯にあるので、地下鉄工事は複雑になるが、トンネルや駅の一体式構造は震度9（ソ連の12階級震度階による）までの地震に耐えられる。

多くの駅がウズベク民族建築の伝統に従ってデザインされており、駅の装飾には大理石、チェカンカ、彫刻、陶磁器が用いられている。



モスクワの電気自動車

ソ連では1970年から電気自動車の開発が進められている。いま設計者の努力は主にバッテリー容量の増大、電気自動車のシャシとボデーの軽量化に向けられている。

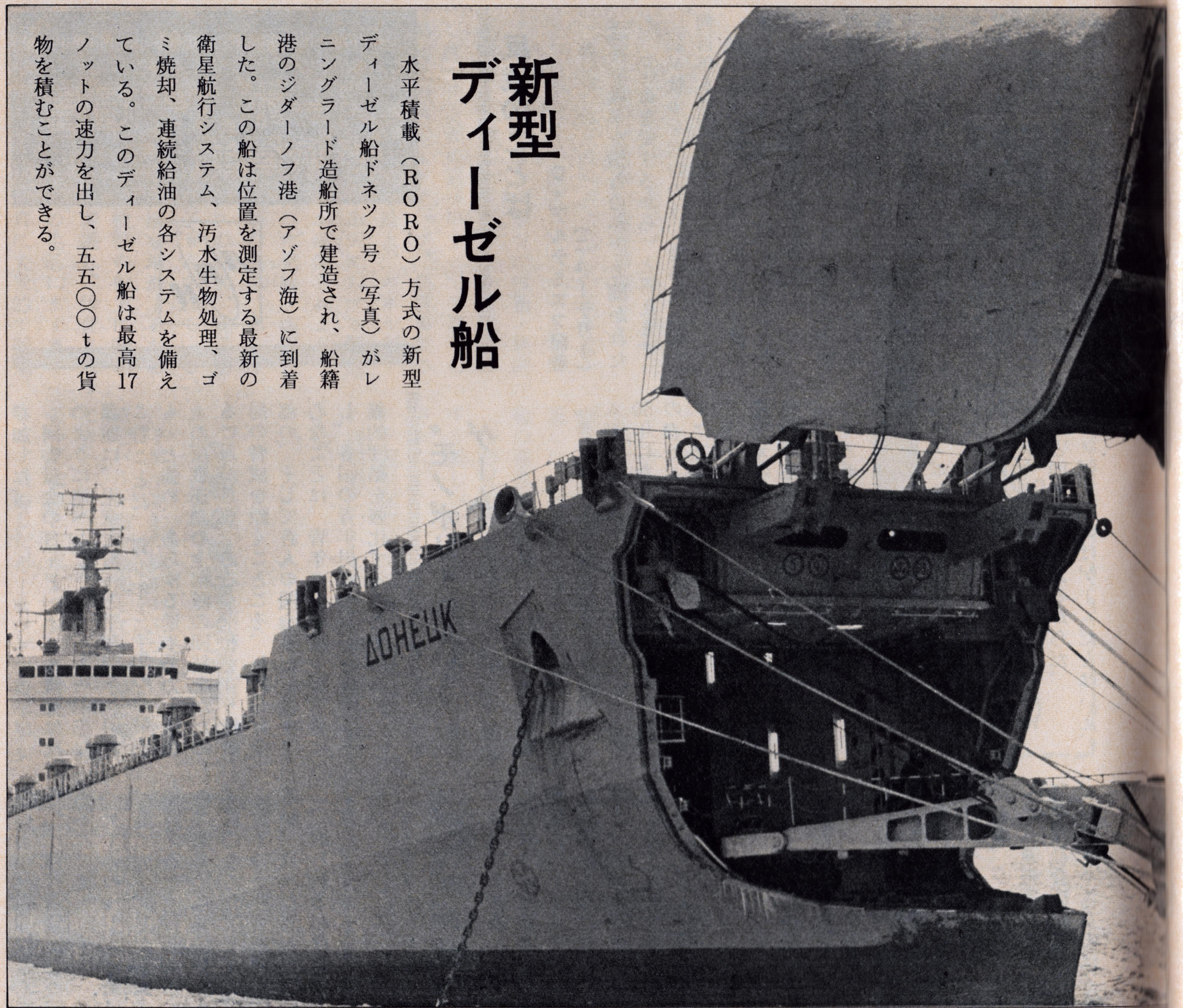
第34モスクワ自動車コンビナートではソ連のさまざまな工場で生産される車体をベースにした電気自動車で営業している。現在、コンビナートには100台の電気自動車があり、これらの車は学校や駅の軽食堂に材料を納入し、小さな貨物を運び、乗合タクシーとして活躍している。モスクワで電気自動車の台数がまもなく300台に増えるため、電気自動車の集中サービスと保守を引き受ける施設の建設が予定されている（写真下は営業中の電気乗合タクシー）。





戻って来た鳥

ソ連では環境汚染を防止し、絶滅寸前の動物を保護するための効果的な措置がとられている。効果は意外に早く現れ、たとえばウルケン・アクタウ山脈（カザフ共和国）の峡谷に珍しい鳥——ナベコウの営巣地が発見された。ナベコウは永年自分たちの生息地を留守にしていたが、最近になって再び戻ってきたもの（写真上）。

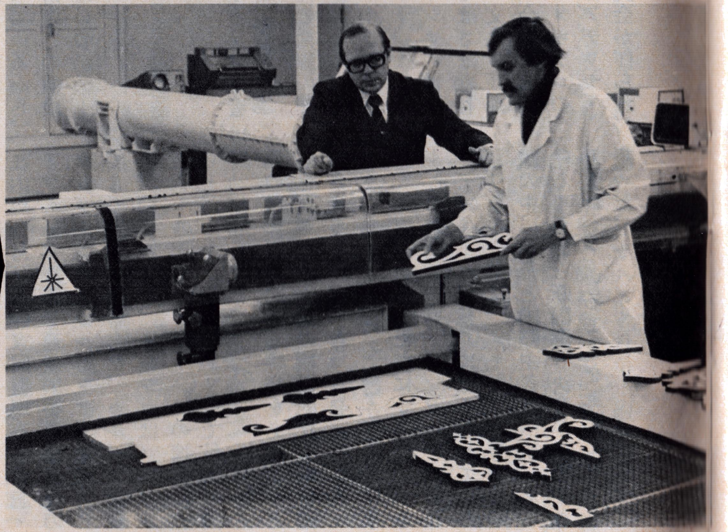


新型ディーゼル船

水平積載（RORO）方式の新型ディーゼル船ドネック号（写真）がレニングラード造船所で建造され、船籍港のジダーノフ港（アゾフ海）に到着した。この船は位置を測定する最新の衛星航行システム、汚水生物処理、ゴミ焼却、連続給油の各システムを備えている。このディーゼル船は最高17ノットの速力を出し、五五〇〇tの貨物を積むことができる。

レーザーで透かし彫り

自動機械が、昔から家や家具の装飾に使われていた手の込んだ透かしの木彫りの技術をマスターした。モスクワの軽機械・織物機械製作研究所が開発した自動レーザー裁断装置（写真右）がそれで、指物師に劣らぬ腕前を発揮する。手づくりの透かし彫りのコストはかなり高い。しかし、この装置を使って製造する場合は生産性は15—20倍上昇し、製品のコストは$\frac{1}{10}$以下になる。



ノーボスチ通信特派員報告

反戦のことば

O・アルテミエフ記者（ニューデリー）

『なぜ戦争を憎むのか』と聞かれたら、『生命を愛するから』と答えます」「私が戦争を憎むのは、戦争は人類を何百年も逆戻りさせるからです……」「私が戦争を憎むのは、私たち子供が現在知っていること、将来知ることをのこらず否定するからです……」「私は戦争がきらいです。戦争は子供の幸せと希望と夢を壊し、子供から身寄りも家も奪ってしまうからです」

これらは第2次世界大戦終結40周年を記念してデリーで行われた朗読コンクール「なぜ私は戦争を望まないか」の決勝に勝ち残った同市の小中学生のことばからの抜粋である。このコンクールはソ印児童問題委員会が主催したもので、デリーの小中学生数百人が参加した。

同委員会のS・P・ホビル議長は次のように述べた。「コンクールの主な課題は、児童をもっと平和闘争へ引きこむことだ。青少年と学生の連帯をもっと強め、あらゆる進歩勢力と地球上の反戦運動の全部隊の団結をかためることが必要である。平和を守り核破局の脅威を除くことこそ、われわれ全部の、そして各人の関心事だ。現在肝心なことは、青年の平和闘争を活発にし、各国の青年男女の友好と反帝国主義的団結を強化することである」

"モノポリー"というゲーム

V・トレチャコフ記者（パリ）

"モノポリー"（独占）という名のゲームがフランスで生まれてからことしで50年になる。生まれたのは一九三五年の春だが、西側世界を席巻し、そのファンは各国で合わせて実に数億人、フランス一国でも全世帯の40％に及ぶ。発売元のパーカー・ブラザース社は発売50周年を記念して6月22日、パリでこのゲームの全仏特別選手権を行う。

"モノポリー"というのはいったいどんなゲームか？　大当たりした秘密はなにか？

"モノポリー"は幻想を生みだすゲームだ。一九三五年といえば"経済大不況"の年、西側におけるこのゲームの需要が今でも相変わらず大きいのは、当時と同じ背景があるからだ。

"モノポリー"はゲームだとはいえ、西側の生活様式の現実——"一獲千金"に賭ける現実を反映したゲームである。

ゲームのルールは簡単で、安く買って高く売る、しかも独占資本家になって買えるだけ買いこみ、ゲームのほかの参加者に自分の条件を押しつけるのが肝心な点だ。ゲームに勝つと、大金と数十の会社、家屋、鉄道が手にはいるが、負けた者もどうということはない。取られるのは紙片とゲーム盤のます目とプラスチックの駒だけなのだから。

"モノポリー"ゲームは発売後50年で、最新の電子玩具をはるかに引き離して人気第一位となっているが、このゲームは現実と密着したゲームで、実際の物価はウナギ登りに上がっているから、新製品のゲームで扱う"財産"の値段を再検討しなければならないのがメーカーの頭痛のタネという。

ローマの茶番劇

L・プラトノフ記者（メキシコシティー）

ローマ法王暗殺未遂事件の共犯の罪に問われているブルガリア人セルゲイ・アントノフを支援するメキシコ連帯委員会の会議がメキシコシティーで開かれた。この委員会はメキシコの世論を背景に作られたもの。さまざまな社会団体や政治団体の代表、文化・芸術活動家、ジャーナリストが会議に参加した。連帯委員会の議長でメキシコの著名な社会活動家でもあるアデリナ・センデクハス女史は、委員会が作られたことによってメキシコの民主的な世論は、ワシントンと一連の西側諸国の反動層の反共"十字軍"の構成部分であるローマの不法な法廷に対して抗議の声を上げることができるようになった、と指摘した。「セルゲイ・アントノフに対する裁判をねつ造することによって反動的帝国主義層は、社会主義諸国に対する悪意に満ちたキャンペーンをいっそう強化するという目的を追求している」とセンデクハス女史は述べた。会議で発言した人々は、ローマにおける裁判茶番劇が可能になったのは米国支配層のタカ派とバチカンの反動勢力が共謀したからだ、と強調した。

通常兵器の軍縮に関する議会間シンポジウムに参加するためメキシコに滞在中だったソ連作家同盟理事会書記・アントノフ擁護ソ連全国委員会議長のウラジーミル・カルポフは、来賓としてこの会議に出席した。カルポフは私の質問に答えて、メキシコはブルガリア人セルゲイ・アントノフの擁護に立ち上がったラテンアメリカで最初の国だ、と指摘して、「この会議は帝国主義の常套手段である挑発をあばこうというメキシコ国民の積極的な立場を確信させるものだ。きょう発言した人々はまったく正当にも"アントノフ事件"をファシストたちによってでっち上げられたサッコ・バンゼッティ事件やディミトロフ裁判になぞらえている。きょうの会議は、メキシコの労働者階級の中に連帯と国際主義の伝統、あらゆる不正義と断固闘う決意が生き生きと脈打っていることを証明した」と語った。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年6月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で、国の経済的、社会・文化的発展と国際政治の一連の問題を審議した。

政治局は一九八六—二〇〇五年度のレニングラード市とレニングラード州の発展のマスタープランの技術・経済的基礎を承認した。このプランに基づいて、市と州の経済のすべての部門の集約化のスピードアップ、公営事業の発展、住民に対する給水、エネルギーと熱の供給の増大、市民に対する輸送サービス、環境保全が確保されよう。また保健事業の一貫した発展、商業と公共給食の物質的基地の強化、あらゆる種類の生活サービスの拡大、就学前施設・学校網の増加が予定されている。

政治局は住民の健康を増進するための体育とスポーツの役割の向上に関連した若干の諸問題を審議し、体育とスポーツをソビエト人の生活にますます積極的に取り入れ、真に大衆的で効果的なものとするのに必要な諸提案の準備をソ連スポーツ委員会その他の関係省庁に委任した。

政治局はM・S・ゴルバチョフ同志とソ連を公式友好訪問したG・フサーク・チェコスロバキア共産党中央委書記長、チェコスロバキア社会主義共和国大統領との会談の成果を検討し、承認した。兄弟的友好と全幅的な相互信頼の雰囲気の中で行われたこの会談は、二つの兄弟党と両国の協同行動を強化する新しい大きな歩みであったと指摘された。

ソ連共産党中央委政治局は審議された諸問題について然るべき決定を採択した。

（イズベスチヤ紙6月8日号）

「平和の帆」署名運動

4本マストの帆船セドフ号は、このほどバルト海を航海してリガ港に帰ってきた。この帆船は「平和の帆」を張って航海し、ポーランドの港に寄港した。乗船したポーランドの青年男女は「平和の帆」に署名した。現在帆に署名した人の数は三万三〇〇〇名にのぼっている。

（プラウダ紙6月10日号）

南ヤクートからモスクワへ直行列車

6月4日、南ヤクート炭田の中心地の新しい鉄道駅からはじめて「ネリュングリ＝モスクワ」の行き先掲示板を掲げた旅客列車が出発した。

こうして旅客は小バム鉄道の最北の駅から乗り換えをしないで、（従来はベルカキト駅で乗り換え）直接モスクワへ行けることになり、とても便利になった。

（プラウダ紙6月5日号）

砕氷船南極へ

6月10日ウラジオストク港から砕氷船ウラジオストク号が、約一万カイリ先の南極大陸に向けて出航した。同船は厚い氷に閉じ込められている学術調査船ミハイル・ソモフ号を救援するために派遣されるもので、ヘリコプター・MI8が搭載され、ベテランの極地パイロットが乗り組んでいる。

（トルード紙6月11日号）



（A・ウミャロフ作、トルード紙6月2日号）

画家サリヤンの花々

モスクワのソ連美術家同盟のホールで「サリヤンの花々」という絵画展が開かれた。外は6月の冷たい雨と霧なのに、会場では世界、とくにアルメニアの最も華やかで、あでやかな色とりどりの花々が明るい気分をかもしだしている。アルメニアの生んだ大画家マルチロス・サリヤン（一八八〇—一九七二）が描いた植物は多く、その名は、よほどベテランの植物学者でなければ到底全部挙げることはできまい。描かれている花々の中には、70年近く経っているものもある。一九〇三年に花を咲かせたものもあれば、一九四五年5月9日戦勝を祝って知人や隣人たちが持ってきたものもある。一九六七年の野の花もあれば、87歳のサリヤンが描いた最後の花もある。ただサリヤンはしおれた花は描かなかった。大地の永遠の美を信じていたからだ。

（イズベスチヤ紙6月12日号）

札幌で写真展

廃虚から生き返った文化財

本誌記者　アンドレイ・アニケーエフ



レニングラード州プーシキン市にあるエカテリーナ宮殿（19世紀初め建造）の緑の客間（上は修復前、下は修復後）



7月には北海道新聞社主催による一連のソ日文化行事が行われる。まず札幌の北海道立近代美術館ではエルミタージュ美術館展が、北海道日ソ友好文化会館では「戦火からの再生——ソビエト文化財復興写真展」が開かれる。そのほかにもソ連の女流ピアニスト、ジャンニヤ・アウバキーロワのリサイタルと道新リクエスト・コンサート、ソビエト映画祭、ソビエト民族衣装によるモデル撮影会など盛り沢山の行事が予定されている。本号では日本初公開の文化財復興写真展を詳しく紹介することにしよう。

対独戦の初めの数年間、ソ連欧州部の大半は一時ドイツ・ファシスト軍に占領され、多くの世代の人々が心血を注いでつくった偉大な文化財が、略奪者の手で無残にも灰じんに帰した。この野蛮な行動は軍事行動の結果でない場合が多く、ほとんどがロシアの貴重な文化財を絶滅する計画的な政策の結果であった。ドイツ軍は歴史的にきわめて貴重な邸宅、宮殿、博物館、劇場、記念物、学校などを破壊した。

ソ連領土が解放された後わかったことだが、戦争は文化財に莫大な損害を与えた。たとえばノブゴロドとプスコフでは、両市の代表的な史跡の約40%が大損害を受けた。レニングラードの郊外のユニークな宮殿、庭園などの施設は廃虚となった。モスクワ西北50kmのイストラ市のノボエルサリム僧院のボスクレセンスキー寺院、ノブゴロドのネレジツァ寺院のスパス教会、キンギセプ（エストニア共和国）の聖母降誕祭教会は、ちょっと復興のめどが立ちそうもなかったほどの重大な損害を受けた。

ドイツ軍の一時占領時に破壊または毀損された史跡・文化財の修復は、通常、都市が解放されるとすぐに始まった。一九四四年夏に早くもノブゴロドでは、住民の積極的応援を得て、史跡や文化財の保護、重要施設の廃虚を外界の影響から守ること、残土の除去、その後の復旧に備えてのインテリア部品の収集などの一次的作業が実施された。それと同時にノブゴロドでは建築物の損害度を判定し、重要建物の復旧の方法と順序を定め、報告した専門家委員会が活動した。

国と地方の機関は戦争が終わるとすぐに、食料、燃料、建設資材が足りないにもかかわらず、文化財の復旧に多額



エカテリーナ宮殿の正面（上は修復前、下は修復後）



ノブゴロドの「ロシア建国1000年」記念碑（1862年）。最も有名な政治家、学者、作家を彫った128の彫刻からなる高浮き彫りは見もの。1943年にドイツ軍はこれを解体してプロシャに発送しようとしたが果たさなかった。下は修復前。







の資金をさき、修復関係者に必要なあらゆるものを融通した。大都市には修復専門のアトリエが設立され、ソ連各地の州の専門家たちが招かれた。こうした措置が実を結び、ロシア・世界文化の貴重な創造物はたちまち生き返った。

いまレニングラード郊外のペトロドボレッツ（ピョートル宮殿）のユニークな宮殿・庭園群を見物にやってくる人たちには、つい最近までこの施設が、かつて美しさの面影など全くない廃虚の山であったとは、到底信じられないだろう。レニングラードの作家パーベル・ルクニツキーはソビエト軍部隊と一緒に解放直後のペテルゴフ（一九四四年以前のペトロドボレッツの名称）に入り、一九四四年のこの地の状態をこう書いた。――「破壊されていない家は一つもない。クラースナヤ通りは家々の廃虚ばかりで、その周りを雪とがらくたがとり巻いていた。打ち壊されたホテルやベルフニー公園の垣は石柱が残っているだけだ。大宮殿も廃虚になっており、そのわきに壊れた装甲車が見える。池はなくなっていて、土台しか残っていない。ベルフニー公園にはネプチューンの像もほかの彫像もない。クラースナヤ通りに通じる門は爆破されて倒壊している」

破壊された建物や文化財はソ連全土の修復専門家の手で復旧された。国は修復のために金も、銀も、良質の木材も惜しまなかった。毎年修復作業費として数千万ルーブルが支出された。たとえば、ペトロドボレッツに使うユニークな織物生地やコブラン織地は旧式な織り方で織られ、正面の彫塑装飾や細かい装飾部品はレニングラードとバルト海沿岸各共和国の工匠が共同で修復し、寄木細工の床はウクライナの専門家たちがなおした。ノボエルサリム僧院では主な修復作業が完了したのち、モスクワの応用美術家たちが17世紀のユニークなタイルの修復を始めた。陶工たちは古い模様を修復する新しい方法を見付け、タイル製造用ペーストの新しい成分を開発した。モスクワの専門家たちはノブゴロドのユニークな壁画を、バルト海沿岸各共和国の専門家はベロルシアとウクライナの多くの文化財や建物を修復した。こうした相互援助のおかげで戦後早々に沢山の重要文化施設を復旧することができた。

いまソ連では史跡や文化財の保存と復旧に非常に力が入れられている。ソ連の国宮修復組織の数は一〇〇以上にのぼり、ソ連文化省がこれらの組織の活動を指導し調整している。ソ連憲法は文化財の保護をソ連の各市民の憲法上の義務としている。過去のすばらしい文化財の保護と修復は全国民の仕事になっており、プロの修復専門家のほか、全ロシア史跡・文化財保護協会加入の数十万人の一般人がボランティアとして保存・修復作業に参加している。

こんどの写真展を通じて、日本の方々は廃虚から再生した貴重なロシアの建築・文化財やその保護と復元、ソ連の修復専門家たちの業績を知ることができよう。

下　終戦直後と現在のペトロドボレッツ（ピョートル1世の夏の離宮）。終戦直後の一九四五年早くも復元計画が立てられ、今も修復工事が続けられている。

下・左　修復前と現在のノボエルサリム僧院（モスクワ州イストラ市）。この僧院はニコン総主教によって夏の別邸として一六五六年に建てられた。修復後、一九五九年5月から公開。現在も修復工事は続いている。







短信アラカルト

新世代の飛行船

巨大な円盤状の貨物飛行船がモスクワ航空研究所で設計されている。このような円盤状のおかげで空気力学的揚力が増す。熱い空気を詰めた、外径が約一五〇mのこの飛行船は積載量三〇〇t、航続距離四〇〇km、時速一五〇kmになる予定。

飛行船の中央部にはロープで地上に下りるプラットホームが配置されるので、着陸せずに貨物の積み下ろしができる。動力装置はターボファンエンジン4基。このエンジンは灯油または液化天然ガスで動くが、燃料消費量は飛行機の$\frac{1}{4}$ないし$\frac{1}{5}$になる。

中央アジア最大の発電所

ウズベク共和国で建設中のノボアングレン火力発電所の最初の発電ユニットが商用運転を開始した。この新発電所はソ連中央アジア最大のもので、設計出力は二四〇万kW。

発電所はアングレン褐炭鉱床から遠くない、大工業地帯の中心部に建設されており、最新の国産設備を備えている。設備の効率が高いので、発電所建設の全費用は6年間で回収できる。

褐炭は煙と灰が沢山出る燃料なので、総合的な環境汚染防止策が予定されている。煙は大気中に排出される前に、何段階ものろ過・浄化・灰の除去装置を通過するので、有害排出物はソ連で採用されている衛生上の基準の$\frac{2}{3}$以下になる。

モスクワ川のウナギ

ソ連の首都を貫流するモスクワ川で大きなウナギがとれた。魚類学者たちはウナギがどうしてモスクワ川に現れたか答えに窮している。しかしウナギがとれたことは、学者たちの意見によれば、川の水がきれいであることの明白な証拠である。ウナギはこの意味で特に〝気むずかしい〟からだ。すでに数年来モスクワ川への産業廃水の放流は完全に中止され、水質監視自動システムが働いている。いまモスクワ川には約30種の魚が住んでいる。

会員一億二〇〇〇万人のソ連赤十字社

ソ連赤十字社・赤新月社同盟の会員は現在約一億二〇〇〇万人。会員たちは医学・衛生知識の宣伝や工業企業、農業企業、集落の衛生状態の監視に参加し、病人と高齢者に医療と社会的援助を与えている。一二〇〇万のドナーが病人に自分の血を無報酬で提供している。

ソ連赤十字社・赤新月社同盟は自然災害、疫病、軍事紛争で苦しんでいる国民に援助を与えている。たとえば昨年はこの種の援助がアジア、アフリカ、ラテンアメリカの37カ国に与えられた。また、まだ保健事業が発達していない諸国にも援助をしている。たとえばエチオピアではソ連赤十字社の病院がもう35年以上も活動している。



語らい（I・コスチン撮影）

催し物のお知らせ

☆ボリショイ劇場バレエ学校特別公演

東京・東京文化会館（7月17、18、19、20、21、22日）、筑波科学万博会場（7月26日）、長野・県民文化会館（7月28日）、群馬・県民会館（7月29日）、宮城・県民会館（7月31日）、宇都宮市文化会館（8月1日）、大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月9、10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・NHKホール（8月18日）。

▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

☆ボリショイサーカス公演日程

東京・東京体育館（7月19—28日）、名古屋・愛知県体育館（7月30日—8月4日）、大阪・大阪城ホール（8月8—12日）、松山・愛媛県民館（8月14—16日）、福岡・福岡スポーツセンター（8月18—26日）、京都・醍醐スケートセンター（8月29日—9月1日）、筑波・エキスポプラザ（9月4—10日）、仙台・宮城スポーツセンター（9月13—16日）、前橋・群馬県スポーツセンター（9月20日—23日）、横浜・横浜文化体育館（9月26—29日）、浜松・市体育館（10月3—6日）

▽お問い合わせは、エミー・インターナショナル内ボリショイサーカス公演本部（電話03・234・7207）へ。

☆北海道・エルミタージュ美術館展

7月13日（土）——8月22日（木）（月曜休館、午前10時〜午後5時。会期中毎週金曜日は午後7時30分まで）

▽場所：北海道立近代美術館（札幌市中央区北1条西17丁目）

▽入場料：一般800円（600円）、高・大生600円（400円）、小・中生300円（200円）

※（ ）内は前売・団体料金

▽お問い合わせは、北海道立近代美術館（電話011・644・6881）、北海道新聞社事業局文化事業部（電話011・221・2111）へ。

世界青年学生祭記念クイズの結果発表

7月下旬からモスクワで行われる第12回世界青年学生祭を記念するクイズ（出題は本誌8、9号。6月1日締め切り）には、難しい問題の割には比較的多くのご応募をいただき、ありがとうございました。

今回は問題がとても難しく、特に第1問は年月日まで正確に答えられた方はいませんでした。次に正解率の悪かったのは第3問と第5問でした。

高得点者の中から厳正な抽せんの結果、次の方々の入賞が決まりました（敬称略）。

1等（1名）　8日間のソ連旅行にご招待。
福田眞由美（宗像市・無職）

2等（2名）　民芸品など。
橘内長次（米沢市・会社員）
箕田英伸（東京都・学生）

3等（5名）　民芸品など。
広田秀樹（東京都・学生）
行本恵一（東京都・学生）
移川　仁（京都市・病院職員）
佐久間律子（新潟県・高校生）
松野幸子（神戸市・無職）

奨励賞（8名）　民芸品など
松野咸五（神戸市・会社員）
平井敏勤（福井市・織物業）
寺崎利春（鳩ケ谷市）
加藤三三（岐阜県・会社員）
田中由佳（東京都・学生）
田中裕介（東京都・会社員）
藤島茂美（岩手県・教師）
山本たえ子（盛岡市・寮母）

正解は次の通りです。

第1問　第1回世界青年学生祭は、チェコスロバキアの首都プラハで、一九四七年7月25日から8月17日まで行われました。モスクワでかつて世界青年学生祭が開かれたのは、一九五七年7月28日から8月11日までの期間です。これまでの世界青年学生祭の標語の中で最も多く使われたことばは、「平和」です。

第2問　14歳から28歳までの四二〇〇万の青年男女を結集しているソ連最大の青年団体の名称は、全ソ・レーニン共産青年同盟——略称でコムソモールです。

第3問　「今日のソ連邦」誌の創刊号が発刊されたのは一九五八年4月です。

第4問　一九五八年に設立された青年ツーリストの国際交流を専門に行うツーリストビューローの名称は、「スプートニク」です。

第5問　モスクワ＝東京間に直通空路が開設されたのは一九六七年4月。

第6問　モスクワ＝東京間の定期空路のほかにあるソ日間の定期空路は、ハバロフスク＝新潟間で、この便が開設されたのは一九七三年6月です。

今日のソ連邦 一九八五年7月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円